

安曇野市の埋蔵文化財第14集

穂高神社境内遺跡 1



新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書

2018. 3

安曇野市教育委員会

表紙写真 穂高神社境内遺跡SB1出土須恵器

裏表紙写真 穂高神社境内遺跡調査地遠景（東から）



調査後遠景（東から） 中央下の白塗りが調査地



調査区（東から）



調査区俯瞰（上が西）



SB1出土土器

序

埋蔵文化財は、安曇野市の過去の人々のくらしや文化、歴史を理解するためにかけがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めています。

本書では、安曇野市の庁舎である新穂高支所の整備事業に際して実施した、穂高神社境内遺跡第1次発掘調査の成果をまとめました。穂高神社境内遺跡は、現在の穂高神社一帯に広がる遺跡です。過去に、穂高神社参道から弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土したため、この時代の遺跡として認識されてきましたが、本格的な発掘調査が実施されたことはありませんでした。

今回の発掘調査では、地表下2.2メートルで古墳時代後期から平安時代にかけて営まれた集落跡を確認しました。これまで遺跡内容が不明確であった穂高神社境内遺跡に、古代の集落が存在したことが明らかになったのです。特に7世紀末から8世紀にかけての遺構・遺物が確認されたことは、律令制の地方での展開に関連して重要な発見です。この調査成果は、安曇野市の歴史にとって貴重な一頁となるに違いありません。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し、序とさせていただきます。

平成30年（2018）3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例 言

- 1 本書は、長野県安曇野市に所在する穂高神社境内遺跡第1次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は土屋和章、松田洋輔、横山幸子が担当したほか、株式会社パレオ・ラボの調査・分析結果を得て山下泰永が統括した。執筆分担は以下のとおりである。
松田洋輔：第5章、第6章2、3 横山幸子：第2章1 株式会社パレオ・ラボ：第7章
土屋和章：前記以外
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は巻末に一括して掲載した。ただし、第7章は項末に掲載した。
- 5 土器付着炭化物及び炭化材の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに業務委託した。
- 6 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)
原明芳、百瀬新治、山田真一

凡 例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2015年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。
穂高神社境内遺跡第1次発掘調査：HTJ15
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。
SB：竪穴建物跡 SK：土坑 ST：掘立柱建物跡 SX：正体不明遺構 P：ピット
- 3 遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（ ）で示した。
- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
弥生土器、土師器：断面無地 弥生土器赤彩：グレー（40%） 黒色土器：グレー（60%）
須恵器：断面黒塗 灰軸陶器：断面グレー塗（18%）
- 5 弥生土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。
例 蓋形土器：蓋 甕形土器：甕 壺形土器：壺 高坏形土器：高坏
- 6 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準じた。
- 7 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。
- 8 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。
埋蔵文化財センター：埋文センター 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委

目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 調査の方法	12
第4章 層序	18
第5章 遺構	19
第6章 遺物	31
第7章 自然科学分析	42
第8章 調査の総括	48
写真図版	51
引用・参考文献	60
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第18図 SB5・6	27
第2図 試掘位置図	3	第19図 SB8	28
第3図 調査地周辺の水系	6	第20図 ST1	29
第4図 穂高地域の弥生時代遺跡	8	第21図 ST2	29
第5図 穂高神社境内遺跡既出遺物	9	第22図 ST3	30
第6図 穂高神社境内遺跡付近の遺跡	10	第23図 SX1	30
第7図 調査区位置図	11	第24図 SX2・SK1	30
第8図 グリッド配置図	13	第25図 出土遺物1	35
第9図 A区13層全体図	14	第26図 出土遺物2	36
第10図 A区16層全体図	15	第27図 出土遺物3	37
第11図 B区SB5・6	16	第28図 出土遺物4	38
第12図 B区SB8	17	第29図 出土遺物5	39
第13図 基本土層	18	第30図 土器付着炭化物(PLD-33271)の 採取箇所	42
第14図 SB1	24	第31図 暦年較正結果	44
第15図 SB2	25	第32図 穂高神社境内遺跡出土炭化材の走査 型電子顕微鏡写真	47
第16図 SB3	25		
第17図 SB4	26		

挿表目次

第1表	事務手続き経過	2	第7表	測定試料及び処理	43
第2表	穂高神社境内遺跡付近の遺跡	10	第8表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	43
第3表	弥生土器観察表	40	第9表	樹種同定結果	45
第4表	奈良・平安時代土器類観察表	40	第10表	安曇野市内の弥生時代中・後期遺跡	49
第5表	金属製品観察表	41			
第6表	石製品観察表	41			

写真目次

1	調査区全景16層完掘（上が東）	51	14	SB6 カマド完掘（東から）	54
2	A区13層完掘（上が東）	51	15	SB6 遺物出土状況	54
3	A区16層完掘（上が東）	52	16	SB8 完掘（東から）	54
4	B区完掘（上が南）	52	17	ST1（北から）	54
5	調査前（北から）	53	18	ST2（北から）	54
6	A区東壁セクション	53	19	ST3（北から）	54
7	SB1 完掘（西から）	53	20	調査地現況（南東から）	54
8	SB1 カマド遺物出土状況	53	21	出土遺物1	55
9	SB2 完掘（西から）	53	22	出土遺物2	56
10	SB3 完掘（東から）	53	23	出土遺物3	57
11	SB4 完掘（西から）	53	24	出土遺物4	58
12	SB5 完掘（東から）	53	25	出土遺物5	59
13	SB6 完掘（東から）	54			

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

徳高神社境内遺跡第1次発掘調査

所在地 長野県安曇野市徳高6658番外

調査面積 336㎡(延調査面積636㎡)

発掘作業 平成27年(2015)10月8日(木)～平成27年(2015)11月30日(月)

整理作業 平成27年(2015)12月1日(火)～平成30年(2018)3月30日(金)

2 事業計画の概要

徳高神社境内遺跡第1次発掘調査の調査原因となった事業は、安曇野市による新徳高支所建設事業である。主な事業内容は、既存の徳高支所の解体と新支所建設・整備工事で、新築建物は、鉄骨造・平屋建て、延床面積971.65㎡の公共施設である。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたが、遺構分布や深度はこれまで不明確であった。



第1図 遺跡位置図

3 調査の契機と経過

穂高神社境内遺跡第1次発掘調査は、新穂高支所建設事業にかかる緊急発掘調査で、調査原因となる事業の工事主体者は安曇野市である。

本件工事については、平成25年度から事業者と安曇野市教育委員会で埋蔵文化財保護協議を開始した。保護協議を進める中で、この遺跡で本格的な発掘調査記録はなく遺物採集記録も断片的であることから、発掘調査開始までに文化財保護法第99条に基づく試掘調査を2回実施し、遺構・遺物の残存状況を確認した（安曇野市教委2015、2017）。試掘調査の結果、既存の支所庁舎のうち鉄骨造で基礎深度の深い箇所では埋蔵文化財が残存していなかったが、既存建物の基礎が浅い東側5分の1程度では埋蔵文化財が残存していることが明らかとなった。この結果に基づき事業者と埋蔵文化財保護協議を再度実施したが、事業計画の変更は不可能で、工事での掘削による埋蔵文化財への影響は不可避であることを確認したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

今回の発掘調査に関わる事務手続きの経過は、第1表のとおりである。

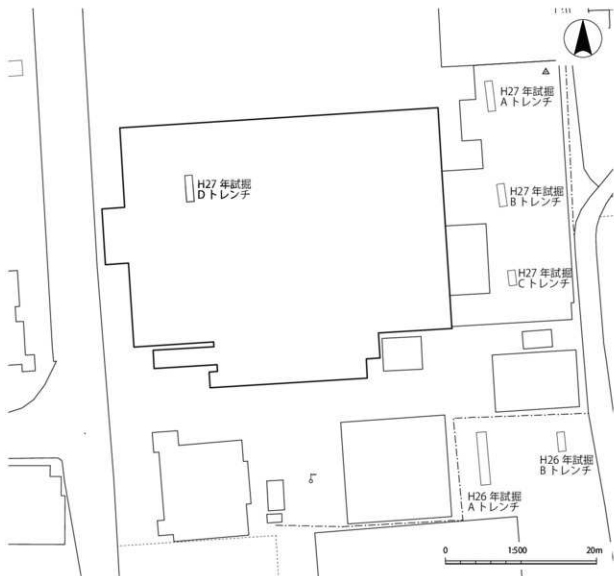
第1表 事務手続き経過

	年月日	文書番号	内容
1	平成27年9月7日	27穂地Bソ-2第78号	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が事業者（安曇野市長）から市教委に提出される。
2	平成27年9月7日	27文Dエ-2第106号	上記1通知を「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（穂高神社境内遺跡）」にて、市教委教育長から県教委教育長に進達する。
3	平成27年9月15日	27教文第8-181号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
4	平成27年9月17日	-	上記3通知を市教委にて受領する。
5	平成27年10月8日 ～平成27年11月30日	-	発掘調査を実施する。
6	平成27年12月8日	27文Dエ-2第173号	「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
7	平成27年12月24日	27文Dエ-2第185号	「埋蔵物発見届」を市教委教育長から安曇野警察署長あて提出する。 「埋蔵文化財保管証」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
8	平成28年1月20日	27教文第20-85号	「文化財の認定及び県帰属について（通知）」が県教委教育長から発出される。
9	平成28年1月25日	27文Dエ-2第204号	上記8の通知を市教委にて受領する。
10	平成28年8月8日	28文Zア-1第81号	「出土文化財譲与申請書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
11	平成28年10月7日	28教文第24-27号	上記10の譲与申請に対して「出土文化財の譲与について（通知）」が県教委教育長から発出され、譲与が承認される。
12	平成28年10月17日	28文Zア-1第121号	上記11の通知を市教委にて受領する。

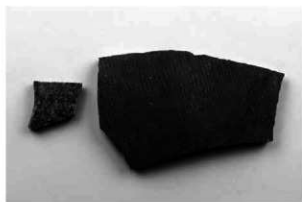
4 試掘・確認調査

平成26年(2014)3月28日の試掘調査時点では、新築予定位置に既存建物が存在したため、敷地の南東隣接地に2箇所のトレンチ(A~B)を設定して埋蔵文化財の有無を確認した(安曇野市教委2015)。徳高神社境内遺跡は、過去に徳高神社参道付近から扁平片刃石斧の出土が知られて以来、今日まで遺物等の出土採集記録がなかったため、遺構分布、遺構深度、時期等の詳細は不明確であった。このことから、遺構深度が深い可能性も想定し地表下200cmまでの試掘を実施した。この結果、地表下130cm以深で須恵器を包含するシルト層を確認した。出土遺物は須恵器甕の体部であったため、詳細時期は不明であったが、シルト層に混入する粉末状の炭化物の存在等から付近に遺構が存在する可能性が高いと判断した。

平成27年(2015)8月8日~9月2日の試掘調査では、既存建物解体後の新築予定地に4箇所のトレンチ(A~D)を設定して、遺構の残存状況を確認した(安曇野市教委2017)。調査の結果、A~Cトレンチの地表下200~250cmで土器片が出土し、弥生時代及び古代の遺物包含層を検出した。



第2図 試掘位置図(建物外形は調査前の既存建物)



平成26年Aトレンチ出土遺物1



平成26年Aトレンチ出土遺物2

5 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	那須野雅好	那須野雅好
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子
調査員	大澤慶哲、土屋和章、松田洋輔	土屋和章、松田洋輔	土屋和章、松田洋輔
作業参加者	伊藤正夫、伊藤延子、小穴金三郎、勝野辰雄、北林節子、田中喜一、等々力哲男、中井秀雄、中嶋織彌、中村哲也、三澤俊秀、宮下智美	田多井智恵、宮下智美	田多井智恵、宮下智美、横山幸子
内容	発掘作業、整理作業	整理作業 自然科学分析業務委託	整理作業 金属製品保存処理業務委託

6 発掘作業・整理作業の経過

穂高神社境内遺跡第1次発掘調査における現場での発掘作業は、平成27年（2015）10月8日（木）～11月30日（月）に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。

整理作業は平成27年（2015）12月1日（火）～平成30年（2018）3月30日（金）に断続的に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理作業の過程においては、遺物の洗浄、注記を平成28年度中に終了し、平成29年度は図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。なお、平成28年度に出土資料自然科学分析業務、平成29年度に金属製品保存処理業務をそれぞれ外部委託した。

7 調査日誌抄

平成27年（2015）

10月8日（木）	トレンチ掘削、土層観察。A区表土除去作業。	10月29日（木）	SB5、SB7、SK1、SX2、ピット精査。
10月9日（金）	トレンチ土層観察。A区表土除去作業。	10月30日（金）	SB4、SB5、SX2精査。
10月13日（火）	A区表土除去作業。13層検出作業。	11月2日（月）	雨天により現場作業中止。
10月14日（水）	A区表土除去作業。13層検出作業。SB1、SB2精査。	11月4日（水）	SB4、SB5、SB7、ピット精査。
10月15日（木）	SB1、SB2、SX1精査。	11月5日（木）	SB4、SB5、ピット精査。
10月16日（金）	SB1、SB2、ピット精査。	11月6日（金）	SB4、SB5精査。
10月19日（月）	SB1、SB2、SX1、ピット精査。	11月9日（月）	雨天により現場作業中止。
10月20日（火）	SB1、SB2、SB3精査。	11月10日（火）	SB4、SB5、SB6精査。雨天により夕方から現場作業中止。
10月21日（水）	SB1、SB3精査。	11月11日（水）	SB4、SB6、ピット精査。
10月22日（木）	SB1、SB3精査。	11月12日（木）	SB4、SB6、SB8精査。
10月23日（金）	SB1、SB2、SB3精査。	11月13日（金）	SB4、SB6精査。
10月26日（月）	SB3、ST1、ST2、ST3、ピット精査。	11月16日（月）	SB6、SB8、精査。現場撤収作業。
10月27日（火）	SB3、ST1、ST2、ST3精査。A区16層検出作業。B区表土除去作業。	11月17日（火）	SB6、SB8精査。現場撤収作業。
10月28日（水）	A区16層検出作業。B区検出作業。SB1、SB4、SB5、SB7、SK1、SX2精査。	11月30日（月）	現場引き渡し。

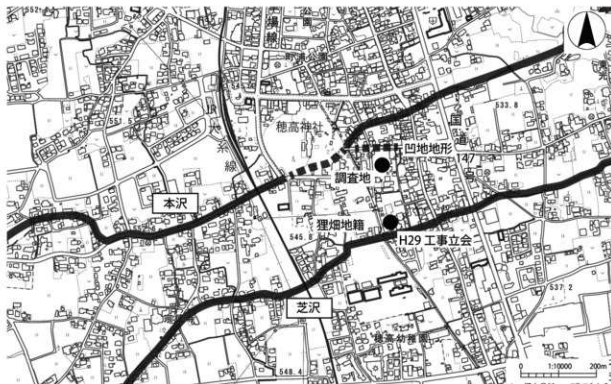
第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

安曇野市を含む松本盆地は長野県のほぼ中央にあたり、西を標高2000m超の飛騨山脈に、東を標高1000m程度の筑摩山地に画される。安曇野市は盆地の中央付近、松本市街地から北西に10km程度の距離に位置する。安曇野市内で現在の集落が分布する範囲は、飛騨山脈山麓の標高およそ700mから市内の最低地点である明科南陸郷の生坂村との境界付近の標高497mまでで、標高差にして約200mの範囲である。

安曇野市内を流れる主な河川としては、高瀬川、烏川、穂高川、黒沢川、犀川が挙げられる。盆地北部から南流する高瀬川と、安曇野市北部において東流する穂高川、盆地南部から北流する犀川の三川が、安曇野市明科地域で合流し、長野盆地へ流入する。盆地西側ではこれらの水系に合流する中房川、烏川、黒沢川などの扇状地が発達し、大規模な扇状地群を形成している。

安曇野市は東西が山岳であり、主な地質帯は付加体堆積物、花崗岩類、第三系堆積岩類の3つとなっている。盆地南西側には泥岩、砂岩、チャート、混在岩からなる中生代の付加体堆積物が、北西側には白亜紀末～古第三紀の花崗岩類が、盆地東側には北部フォッサマグナに属する第三紀中新世の堆積岩類が分布する。また、盆地内部には第四系が広く分布し、層厚400m以上とされている(原山ほか2009)。



第3図 調査地周辺の水系(穂高町教委2001aをもとに作成)

盆地東側では、糸魚川-静岡構造線に属する松本盆地東縁断層が北北西-南南東へ延びる（東郷ほか1999、松多ほか1999）。この断層に沿って犀川が北流し、筑摩山地西側斜面では三角末端崖が連続する。これらのことから、盆地の形成に松本盆地東縁断層が関与している可能性が高い。

徳高神社境内遺跡は烏川扇状地に位置し、烏川は松本盆地西側の北アルプスに端を発する。付近には主として付加堆積物が分布し、河床には粘板岩、硬砂岩、チャート、ホルンフェルスなどの礫がみられる。

小穴喜一は、烏川から分流する本沢が徳高神社内で自然流として流下していた跡が認められるとした（小穴1987）。同じく徳高神社南側の狸畑地籍では、烏川から分流する芝沢の円礫が帯状に連続し、かつての沢筋跡をとどめていると述べた。徳高町教育委員会は、本沢と芝沢の現在の位置を図示した（第3図、徳高町教委2001a）。この図によると、調査地付近の北側およそ100mに本沢が、南側およそ200mに芝沢が東流している。このうち本沢については、徳高神社の境内に古い流路地形が残されているとしている。

現在でも、徳高神社正面から本調査地へ伸びる市道徳高1級2号線に東西方向、東傾斜の凹地が残っており、東流する沢地形と推察できる。これは、第3図で示した本沢の流路付近から分岐する沢地形であり、本沢の旧流路のひとつが調査地の北側へ流れていたと考えられる。

また、芝沢の北側およそ30mの地点において、平成29年（2017）11月20日実施の個人住宅建設に係る工事立会で、地表下およそ20cmに深に自然堆積の礫層を確認した。このことは、現在の水路のごく近い場所に芝沢の自然流が流れていたこと示している。

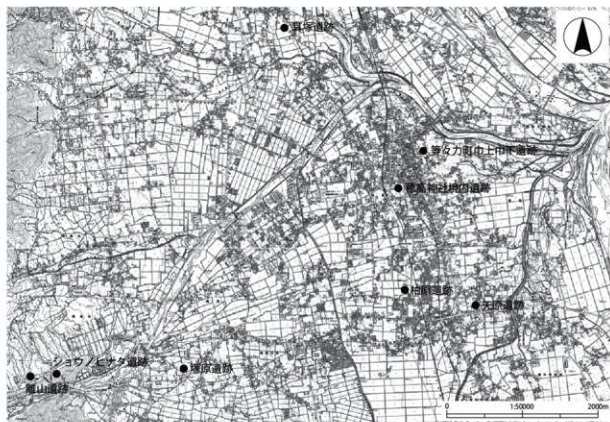
以上のことから、本沢、芝沢の自然流が、かつて調査地付近へも流れていたことはほぼ確実といえる。本調査でも、A区中央付近で東西方向の流路跡が検出された。これらの状況から、調査地は本沢、芝沢の自然流の強い影響下にあったと考えられる。

2 歴史的環境

徳高神社境内遺跡は、過去に徳高神社参道付近から扁平片刃石斧と土師器の器台が出土したことを契機として、弥生時代から古墳時代前期の遺跡として認識されるようになった（南安曇郡誌改訂編集会1968）。

徳高神社境内遺跡の所在する安曇野市徳高地域における弥生時代の遺跡は、『徳高町誌』にまとめられている（徳高町誌編集委1991）。『徳高町誌』によると、南安曇郡内の弥生時代遺跡数は18を数え、内訳は徳高町8、堀金村3、豊科町1、三郷村4、梓川村（現松本市）2となっている。なお、このうち豊科町の町田遺跡、三郷村の黒沢川右岸遺跡、堂原遺跡が弥生時代中期に属し、これ以外は弥生時代後期に属する。以下、徳高地域に所在する弥生時代遺跡として掲載されている8遺跡を取り上げる。

等々力町巾上巾下遺跡は、烏川、乳川が合流して東流する徳高橋南東方向の段丘上に所在する。平成13年（2001）に徳高町教育委員会が発掘調査を実施し、地表下約2.3mで奈良時代～平安時代前半の竪穴建物跡5棟を確認した（未報告）。これ以前に、個人によってサイロ建設の際に地表下1mに深から石包丁、管玉、弥生時代後期の土器、土師器、須恵器、灰釉陶器が採集されている。



第4図 穂高地域の弥生時代遺跡

徳高神社境内遺跡は、本書で取り扱う遺跡である。次項のとおり、かつて徳高神社参道で室を造る際に、地表下1～1.3m付近で扁平片刃石斧や土器が出土したため遺跡として認識された。出土土器には、櫛目文の施された甕と無文赤色塗彩の器台がある。

柏原遺跡は、JR大糸線の柏矢町駅西方一帯の水田地帯に所在する。この一帯は、烏川扇状地の扇央にあたり、西方の扇頂から東流する流路（自然流及び「縦堰」と呼ばれる自然流を利用した人工流路）が多く存在する。また、柏原遺跡の東方には、古墳時代から平安時代まで継続する矢原遺跡群が広がる。かつて、個人により「朱塗り土器」（所在不明）が採集されたことから弥生時代の遺跡と考えられているが、遺跡の内容や範囲は不明確である。

矢原遺跡（現在の矢原遺跡群）は、JR大糸線の柏矢町駅東方の烏川扇状地扇端付近に広がり、遺跡中央付近には矢原神明宮が所在する。遺跡の継続期間は長期にわたり、縄文土器、打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、灰軸陶器が採集されている。この遺跡内では、これまでに多くの発掘調査が実施されており、弥生時代から平安時代にかけての集落群と考えられる。

離山遺跡は、烏川扇状地の扇頂に位置する遺跡で、後述するショウノヒナタ遺跡と隣接する。この遺跡からは、土器、環状石斧、石包丁の出土があったとされる。なお、この石包丁は『源訪史』第1巻に掲載されているが、実物確認はできていない（島居1924）。

ショウノヒナタ遺跡は、前述の離山遺跡と隣接する烏川扇状地扇頂の遺跡である。烏川第二発電所敷地内から縄文中・後期土器と共に櫛目文土器片が少量出土したとされるが、遺跡内容及び範囲は不

明確である。

塚原遺跡は、烏川扇状地扇尖に所在し、前述の離山遺跡、ショウノヒナタ遺跡の東約2kmにあたる。かつて、土器、石鏃、石包丁、太型蛤刃石斧が出土したとされるが、出土地点及び遺物所在は不明である。

耳塚遺跡は、穂高有明の乳川右岸段丘上に所在する。かつて、櫛目文を持つ土器が出土したほか、個人宅から5世紀に比定される土師器が出土している。

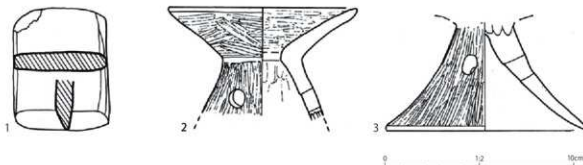
『穂高町誌』発行以降は、穂高地域で発掘調査によって新しく確認された弥生時代後期の集落跡はない。近年、中期の遺跡としては、他谷遺跡で再葬墓、南原遺跡、芝宮南遺跡、蘇塚遺跡で土器片が出土しているが、明確な遺構は確認していない（穂高町教委2001ab、安曇野市教委2016、2018）。近年では、平成28年度実施の等々力町巾巾下遺跡第2次発掘調査、平成28年度実施の潮遺跡群 潮 神明宮前遺跡第3次発掘調査で弥生時代後期の堅穴建物跡が確認された。

3 穂高神社境内遺跡の概要

穂高神社は、安曇氏の奉斎した神社といわれ、『延喜式』にも名を連ねる長野県内でも古い神社の一つである。穂高神社境内遺跡は、この穂高神社境内及び周辺一帯を含む広い範囲となっている。

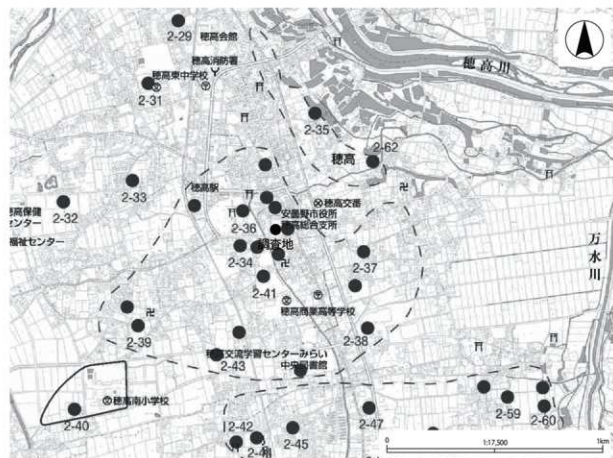
穂高神社境内遺跡は、過去に穂高神社参道から弥生時代の扁平片刃石斧が出土したことから遺跡として認識されるようになった（南安曇郡誌改訂編纂会1968）。この扁平片刃石斧は、全長6.4cmを測る。『南安曇郡誌』及び『穂高町誌』によると、かつて参道付近に室を作る際、遺物が出土したとある（南安曇郡誌改訂編纂会編1968、穂高町誌編纂委1991）。出土地点では、黒土層の下に砂礫層があり、その真上あたりの地表下1～1.3m付近で、木炭、土器、扁平片刃石斧が出土した。土器は櫛目文が施された甕と無文赤色塗彩の器台で、器台は器受部の直径が10cmを測り、脚部は3分の2が欠損する。器受部と脚部は貫通しており、脚部には透孔が3個あけられ、器内外ともにミガキ調整が施される。赤色塗彩は外面全面と内面の器受部に見られ、古墳時代に属するとされる。

この遺物出土以降、穂高神社境内遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡として認識され、遺跡内の土木工事等に際して工事立会等の保護措置が継続されてきたが、今日まで遺構・遺物の出土は認められなかった。このため、本書第1章4に記載した試掘調査を実施するまで、遺跡の残存状況及び時代等の内容、深度は不明確なままであった。



第5図 穂高神社境内遺跡既出遺物（穂高町誌編纂委1991から転載）

第2章 遺跡の位置と環境



第6図 穂高神社境内遺跡付近の遺跡（平成22年3月31日調査）

第2表 穂高神社境内遺跡付近の遺跡

No.	遺跡名	種類	時代	No.	遺跡名	種類	時代
2-29	貝梅道上遺跡	集落跡	平安	2-40	芝宮南遺跡	集落跡	平安
2-31	辻遺跡	集落跡	古墳・平安	2-41	穂高高校北遺跡	集落跡	平安
2-32	一本松遺跡	集落跡	平安	2-42	大坪沢遺跡	集落跡	平安
2-33	神の木遺跡	集落跡	平安	2-43	南原遺跡	集落跡	弥生
2-34	宮脇遺跡	集落跡	弥生中期・平安・中世	2-44	長者池遺跡	集落跡	古墳・平安
2-35	等々力町巾上巾下遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安	2-45	追廻遺跡	集落跡	平安
2-36	穂高神社境内遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安	2-47	三枚橋遺跡	集落跡	弥生中期～中世
2-37	北才の神遺跡	集落跡	古墳後期・平安	2-59	堀之内遺跡	集落跡	古墳中期～後期・中世
2-38	藤塚遺跡	集落跡	古墳後期・平安	2-60	矢原巾上遺跡	集落跡	古墳中期～後期
2-39	宗徳寺遺跡	集落跡	平安	2-62	等々力城跡	城館跡	中世

※穂高神社境内遺跡については、今回の調査結果を反映している。



第7図 調査区位置図 (建物外形は調査前の既存建物)

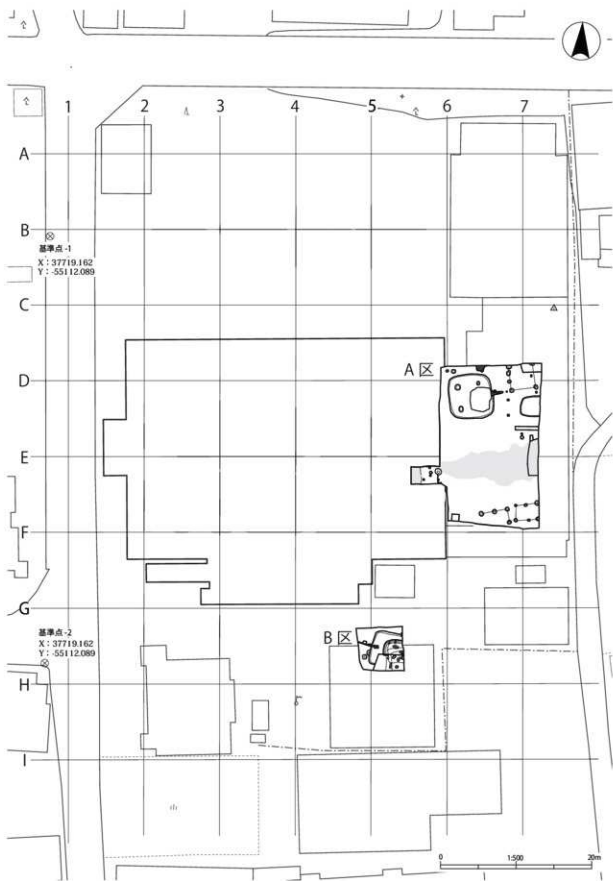
第3章 調査の方法

穂高神社境内遺跡第1次発掘調査の調査原因である新穂高支所建設事業の事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、事業に先立つ試掘調査結果から新穂高支所建設箇所の東側5分の1程度で遺構が良好に残存していることが確認されたため、記録保存のための発掘調査を念頭に事業者と保護協議を継続した。この協議の結果、工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認された。このため、事業者と保護協議を再度行い、発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかった。

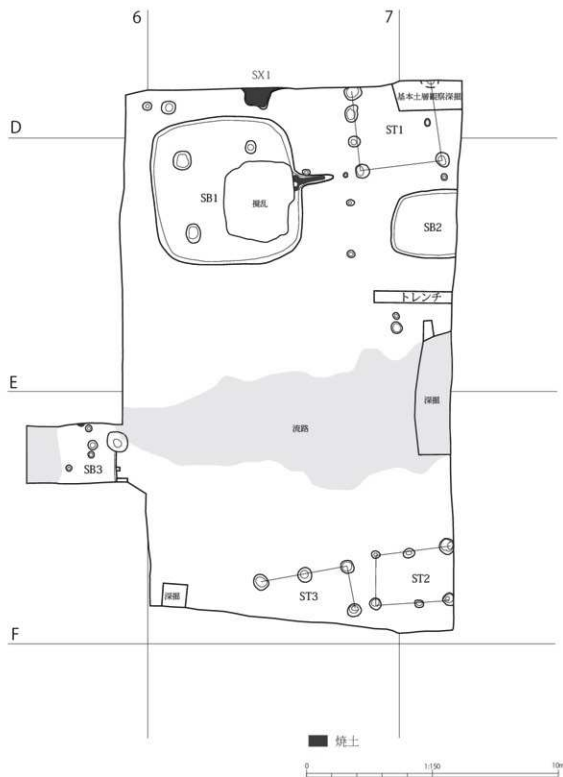
発掘調査では、新穂高支所建設予定地のうち遺構が残存している部分にA区、敷地内南側の駐車場予定地のうち雨水浸透施設設置箇所B区を調査区として設定した。調査地は、穂高神社拝殿から矢原堰を挟んで、南東に約200mの位置となる。調査にはグリッド法を採用し、測量業者によって穂高支所敷地全域を対象として1辺10mのグリッドを設定した。なお、本件発掘調査の基準点測量では日本測地系を採用している。遺構の所在、遺物の出土位置等は、この調査用グリッドを基本として記載している。表土除去作業では、建設用重機を用いて現代の造成土及び遺構検出面直上までの堆積土を除去した。この後、遺構検出面（13層）直上から下の土層の掘削及び遺構検出は人力で行った。また、調査を進める中でA区では13層のほか16層でも遺構が検出されたため、13層調査終了後に再度建設用重機で16層直上まで堆積土除去をした後、人力で遺構検出・精査を実施した。

遺物の取り上げは基本的に遺構ごとに行い、遺構外出土遺物についてはグリッドごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真は現場・整理ともに主としてデジタルカメラを使用した。

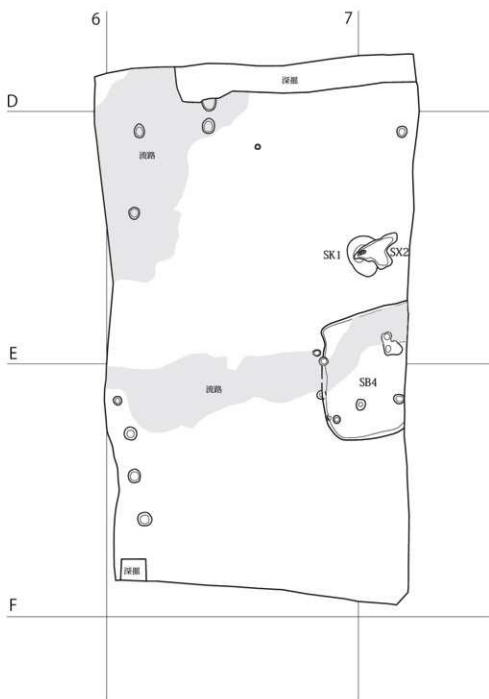
整理作業としては、現場作業終了後に室内にて土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。また、出土資料の自然科学分析及び金属製品の保存処理は外部委託した。



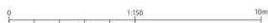
第8図 グリッド配置図（建物外形は調査前の既存建物）

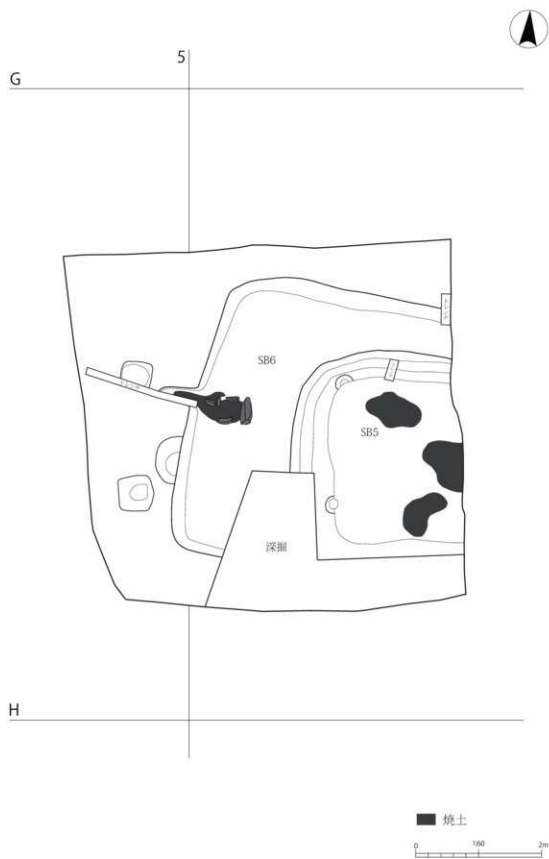


第9図 A区13層全体図

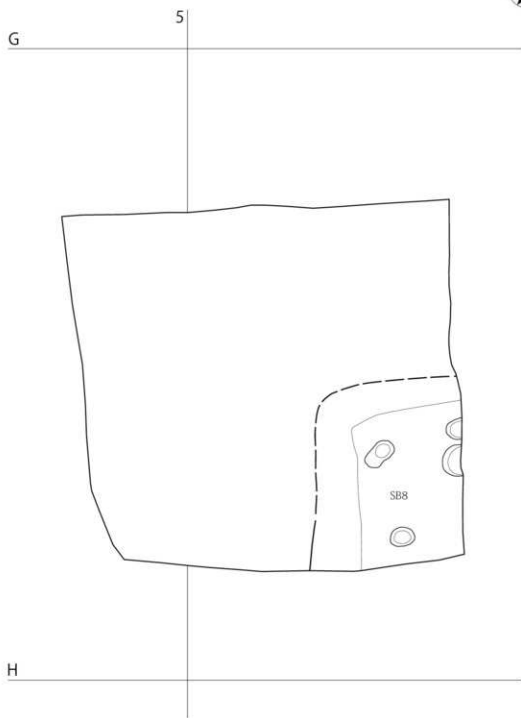


第10図 A区16層全体図

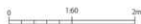




第11図 B区SB5・6

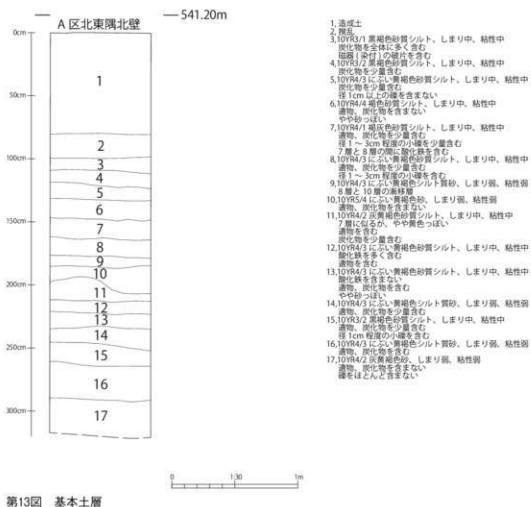


第12図 B区SB8



第4章 層序

今回の調査区で観察した基本土層の詳細は、第13図の通りである。基本土層の観察は、A区北東隅北壁の北壁で実施した。観察地点では、地表面から深度約320cmまでに17層の土層を確認した。このうち1～2層は現代の造成土である。3層には磁器破片が混入するため、これ以深が近代以前の形成層になる可能性がある。深度150cm付近の7・8層では鉄分の沈着を観察した。穂高地域の遺跡では、この鉄分沈着層上下に土器微細片や粉末状炭化物が包含されることが多い。今回の調査では、13層上面及び16層上面の2面で遺構を確認した。17層は砂層で、遺構等が存在しないことを確認した。



第5章 遺構

穂高神社境内遺跡第1次発掘調査で確認された主な遺構は、堅穴建物跡7棟、掘立柱建物跡3棟、正体不明遺構2箇所、土坑1基で、古墳時代後期から平安時代に属すると考えられる。以下に、それぞれの詳細を記載する。また、A区中央付近で東西方向の流路跡が検出された。この流路は、SB3の一部及びSB4を切っている。

1 堅穴建物跡

(1) SB1

検出層位 基本土層13層

位置 A区C6、D6グリッド

平面形・規模 5.8×5.8mでほぼ正方形を呈し、主軸方向はN80°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土はカマド内の堆積土を含め8層を確認した。住居内覆土の主体は、小礫混じりの褐色土であるが、カマド北側の住居壁付近では、焼土粒を含む堆積土が確認された。

床面 径40～70cm程度の主柱穴を3基確認している。

カマド 東壁中央付近に構築されている。燃焼部は一部に攪乱を受けて削平されているが、支柱石の抜き取り痕跡は確認できた。カマドの袖石は確認していない。煙道内の堆積土にも、焼土の混入が見られる。残存している煙道の東端から直線上に約70cm離れた位置に径約20cmのピットが確認されており、煙道に付随する遺構の一部と考えられる。

重複関係 煙道部西端の北側の一部をP7が切っている。

(2) SB2

検出層位 基本土層13層

位置 A区D6、D7グリッド

平面形・規模 2.6×(2.6)mでほぼ正方形を呈すると推定され、南北軸方向はN4°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は礫混じりの暗褐色土、1層を確認した。

床面 床面を丹念に精査したが、主柱穴等の遺構は確認できなかった。

カマド 北・西・南壁には構築されていない。東壁は、調査区域外であり確認できていない。

重複関係 本遺構と重複関係にある遺構はない。

その他 調査区東壁にかかるため、全体を調査できていない。

第5章 遺構

(3) SB3

検出層位 基本土層13層

位置 A区E5グリッド

平面形・規模 (2.4) × (2.2) mで平面形は不明である。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺構の西側及び東壁の一部を切る流路による堆積及び、流路の影響を受けなかった遺構覆土1層を確認した。

床面 径約20～40cmのピットを4基確認したが、遺構の平面形が不明なため主柱穴となり得るかは不明である。

カマド 遺構の西側を流路に切られ、南北は調査区域外であるため確認できていないが、遺構北側の調査区外との境界付近に径約30cmの焼土範囲を確認した。

重複関係 本遺構と重複関係にある遺構はない。

(4) SB4

検出層位 基本土層16層（構築は13層上面か）

位置 A区D6、D7、E6、E7グリッド

平面形・規模 4.9 × (3.4) mで平面形は方形を呈すると推定され、推定主軸方向はN73° Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層を確認した。覆土1層から3層の全て、かつ床面の一部を切る流路による堆積を確認した。

床面 床面を掘り込み径約40cmの柱穴を、2基確認した。

カマド 西壁の一部が流路に切られ、東壁が調査区域外であるため、確認できていない。

重複関係 本遺構と重複関係にある遺構はない。A区中央の東西流路がSB4を切っているため、遺構構築面は13層上面である可能性が高い。

(5) SB5

検出層位 基本土層13層

位置 B区G5グリッド

平面形・規模 (3.7) × (4.3) mで平面形はほぼ正方形を呈すると推定され、推定主軸方向はN89° Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、他の覆土の堆積に比べ、ややしまりの強い土層が壁沿いに段をつけるように堆積している。覆土はカマド内の堆積土を含めて4層を確認した。住居内堆積の主体は、遺物や炭化物を含むにぶい黄褐色土であるが、壁沿いにややしまりの強い灰黄褐色土や床面に焼土を確認した。

床面 焼土範囲を3箇所確認したが、本遺構に関係する柱穴は確認できなかった。P50・51は床面より上からの掘り込みである。

カマド 東壁中央付近に構築されている。調査区域東壁に、カマド袖石と燃焼部の焼土が確認された。

床面で確認された調査区域東壁にかかる焼土は、このカマドに関連するものである。

重複関係 SB6、SB8を切っている。

(6) SB6

検出層位 基本土層13層

位置 B区G4、G5グリッド

平面形・規模 (4.9) × (5.9) mで平面形はほぼ正方形を呈すると推定され、主軸方向はN83° Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、ややなだらかに立ち上がる。覆土はカマド内の堆積土を含めて5層を確認した。住居内堆積の主体は、遺物や小礫を含む暗褐色土である。

床面 カマド右袖付近から土師器甕（第28図57）、本遺構の北西隅付近から完形に近い土師器甕（第27図56、第28図58）が出土している。柱穴は確認できなかった。

カマド 西壁中央付近に構築されている。袖石を確認できたが、一部抜き取られている箇所もある。燃焼部や煙道は比較的良好に残存している。

重複関係 SB5に切られている。

(7) SB7

A区16層検出時にE6・E7グリッド付近で基本土層16層と土質の異なる箇所を確認したので、SB7として調査を実施した。平面検出と平行しサブトレンチを設定し精査したが、遺構の平面形及び掘り込み、遺物が確認されなかったため遺構ではないと判断して欠番とした。

(8) SB8

検出層位 基本土層13層

位置 B区G5グリッド

平面形・規模 (2.7) × (2.6) mで平面形は床面の形状から方形で、南北軸方向はN7° Wと推定できる。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.7mで、壁の中腹に段を持つ。覆土は遺物や小礫を含む、にぶい黄褐色土を1層確認した。

床面 ビットを4基確認したが、いずれも掘り込みが浅く柱穴とはなり得ないと考えられる。

カマド 確認できていない。

重複関係 SB6に切られており、床面のみを確認した。

2 掘立柱建物跡

(1) ST1

検出層位 基本土層13層

位置 A区C6、C7、D6、D7グリッド

平面形・規模 東西（1間）×南北（1間）

柱穴 直径約50～70cm、柱痕跡は確認できていない。

柱間 東西約3.2m、南北約3.2m

重複関係 重複関係にある遺構はない。

(2) ST2

検出層位 基本土層13層

位置 A区E6、E7グリッド

平面形・規模 東西（2間）×南北（1間）

柱穴 直径約30～60cm、柱痕跡は確認できていない。

柱間 東西約1.4m、南北約2.0m

重複関係 重複関係にある遺構はない。

(3) ST3

検出層位 基本土層13層

位置 A区E6グリッド

平面形・規模 東西（2間）×南北（1間）

柱穴 直径約50～60cm、柱痕跡は確認できていない。

柱間 東西約1.8m、南北約1.8m

重複関係 重複関係にある遺構はない。

3 その他の遺構等

(1) SX1

検出層位 基本土層13層

位置 A区C6グリッド

平面形・規模 (0.8) × (1.8) m

遺構の状況 覆土は1層を確認し、焼土や土器片を多く含んでいる。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

その他 調査区北壁にかかるため、全体は調査していない。

(2) SX2

検出層位 基本土層16層

位置 A区D7グリッド

平面形・規模 最大長1.9mで不定形

遺構の状況 覆土は1層を確認している。

重複関係 SK1を切っている。

(3) SK1

検出層位 基本土層16層

位置 A区D6、D7グリッド

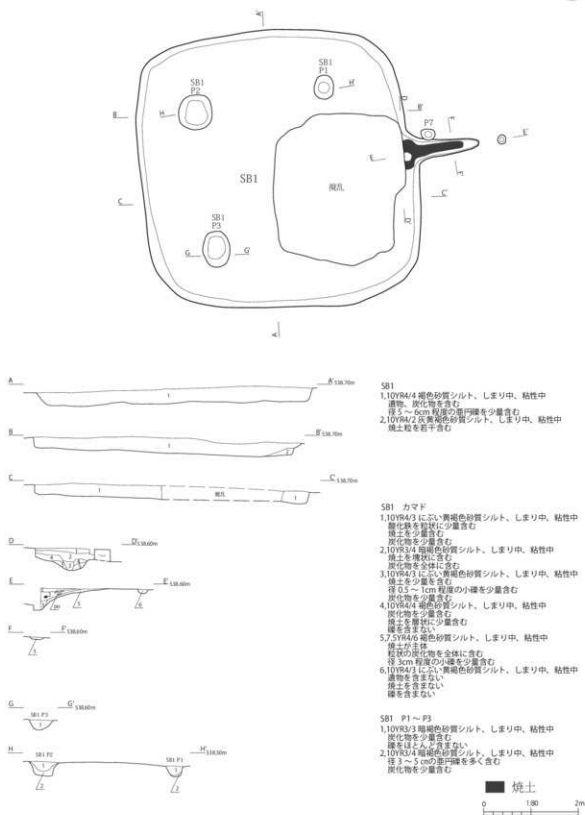
平面形・規模 直径約1.6m

遺構の状況 覆土は1層を確認している。

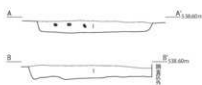
重複関係 SX2に切られている。

(4) 流路

A区中央やや南側を東西方向に流れる。調査区東壁セクションでの土層観察では、基本土層11層堆積後に流路が流れ、その後基本土層10層が堆積していることを確認した。この流路は、SB3・SB4の覆土を切っている。SB4は、流路によって遺構中央部分が流失している。



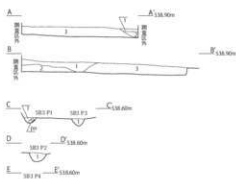
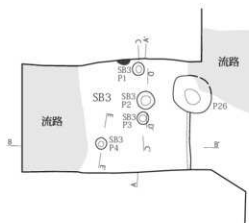
第14図 SB1



1.10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 遺物、炭化物を全体に少量含む
 径 5cm 程度の礫を少量含む



第15図 SB2



SB3

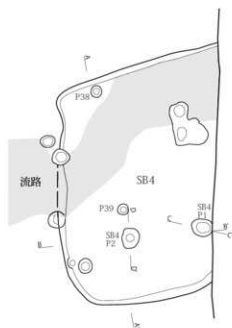
- 1.10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 径 3cm 程度の小礫を少量含む
- 2.10YR4/1 灰黄色砂質、しまり弱、粘性弱
 径 3～5cm 程度の器片礫が主体
 土層片を少量含む
- 3.10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 粒状の炭化物を全体に含む
 径 3～5cm 程度の小礫を少量含む
 土層片を含む

SB3 P1～P4

- 1.10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 遺物、炭化物を含む
 径 3～5cm 程度の礫を少量含む



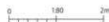
第16図 SB3



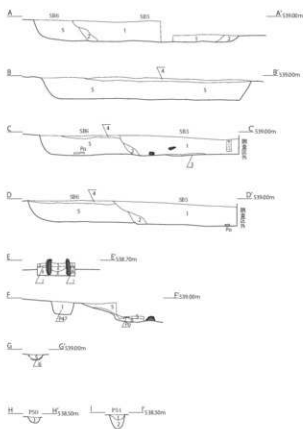
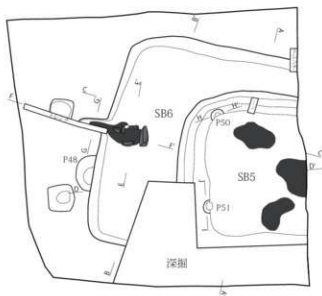
SB4
 1.10V03/3 暗褐色粘質シルト、しまり中、粘性中
 下部に堆土、灰土層を層状に含む
 2.10V04/3に多い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 厚1~2cm程度の小礫を多く少量含む
 3.10V05/4に多い黄褐色シルト質砂、しまり中、粘性中
 均質な砂層、礫を含まない

P38, P39
 1.10V04/4 暗褐色粘質シルト、しまり中、粘性中
 SB4 掘り込み跡付近から掘り込むピット
 礫や灰土を少量含む

SB4 P1, P2
 1.10V04/2 黄褐色粘質シルト、しまり中、粘性中
 灰土、礫を多く含む
 遺物を少量含む
 2.10V04/3に多い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 遺物を少量含む
 厚1cm程度の小礫を含む



第17図 SB4



第18図 SB5・6

SB5・6・SB6 カマド

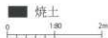
1. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
や中しまりの強い 10YR4/2 灰黄褐色土を所々に含む
遺物、炭化物を含む
SB5 層上
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
1層に比べ、しまりが強い
炭化物を少量含む
SB5 層上
3. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
炭化物、炭土を多く含む
炭化物を含まない
SB5 層上
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
遺物、炭化物を少量含む
炭土と炭くさる
SB5 層上
5. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
遺物、炭化物を含む
10YR3/2 黒褐色土を炭材に所々含む
径 3cm 程度の小礫を含む
SB5 層上
6. 7.5YR4/6 褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
炭化物、炭土を多く含む
骨片を含む
SB6 カマド層上
7. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
6層より風土が少なくない
炭化物を少量含む
SB6 カマド層上
8. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
遺物を含まない
炭化物を少量含む
径 1～3cm 程度の小礫を含む
SB6 カマド層上

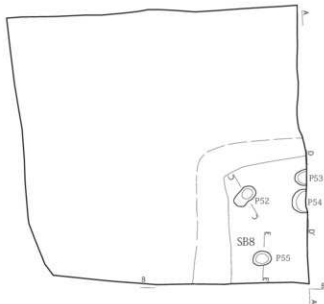
P47

1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
炭化物、遺物を少量含む
遺物を含む
径 1～3cm 程度の小礫を含む

P50・51

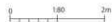
1. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
炭化物を含む
径 1cm 程度の小礫を含む
径 1cm 程度の小礫を含む
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂、しまり弱、粘性弱
径 1cm 程度の小礫を多く含む



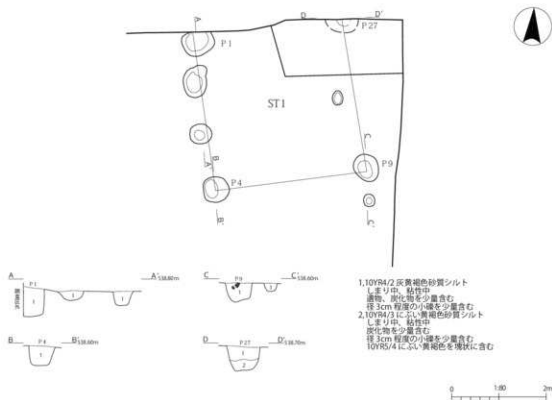


- SB5・6・8
- 1.10YR4/2 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 中～しまりの塊、10YR4/2 灰黄褐色土を所々に含む
 遺物、炭化物を含む
 SB5 層上 1 層 (第 16 箇) と同じ
 - 2.7.5YR4/3 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 粘土、炭化物を多く含む
 縁を含まない
 SB5 方マド粘土
 - 3.10YR4/2 に近い黄褐色砂質シルト
 しまり中、粘性中
 炭化物を多く含む
 遺物を含む
 - 4.10YR4/2 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 遺物、炭化物を含む
 径 1 ～ 3cm 程度の小礫を含む
 SB8 層上
 - 5.10YR3/3 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 塊状、炭化物を含む
 10YR3/2 黄褐色土を層状に所々含む
 径 3cm 程度の小礫を含む
 SB8 層上 5 層 (第 18 箇) と同じ

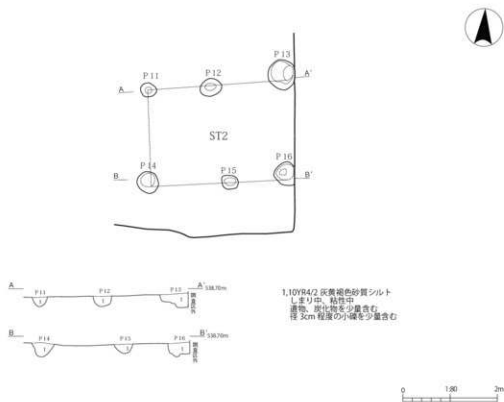
- PS2～55
- 1.10YR4/2 に近い黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
 所々に砂を塊状に含む



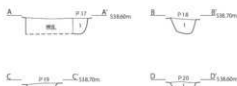
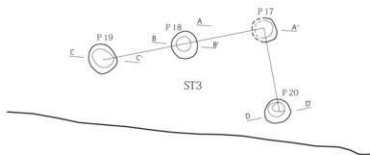
第19図 SB8



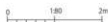
第20回 ST 1



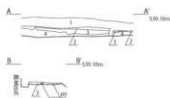
第21回 ST 2



1,10V94/2 灰黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
遺物、灰化物を少量含む
径3cm程度の小礫を少量含む



第22図 ST3



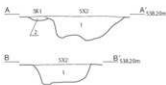
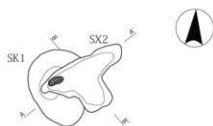
SX1

1,10V94/2 灰黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
基本土層7層に似るが、やや黄色っぽい
遺物を含む
灰化物を少量含む
基本土層11層(第13図)と同じ
2,10V94/3 濃い黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
灰化物を多く含む
遺物を含む
基本土層12層(第13図)と同じ

3,10V93/3 暗褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
灰化物を含みに多く含む
粘土を多く含む
之を多く含む
SX1層土
4,10V94/1 濃い黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
灰化物を含まない
遺物、灰化物を含む
やや砂っぽい
基本土層13層(第13図)と同じ

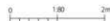


第23図 SX1



SX2

1,10V94/2 灰黄褐色シルト質砂
しまり中、粘性中
径5mm程度の小礫を少量含む
下部に灰化物を数粒に含む
SX2層土
SK1
2,10V93/3 暗褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
灰化物を粉状に少量含む



第24図 SX2・SK1

第6章 遺物

穂高神社境内遺跡第1次調査では、弥生時代及び古墳時代から平安時代の遺物が出土した。主な遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、鉄製品である。土器類の記載について、弥生土器は長野県埋蔵文化財センター発行の松原遺跡発掘調査報告書（長野県埋文センター1998）、古墳時代の土器は長野県埋蔵文化財センター発行の榎田遺跡発掘調査報告書（長野県埋文センター1999）、奈良・平安時代の土器は長野県埋蔵文化財センター発行の長野自動車道関連発掘調査報告書（小平1990）を主として参考にし、必要に応じて補足した。なお、編年的な記載については各文献の区分（期、段階）をそのまま記載する。

1 土器類

(1) 弥生土器

今回の発掘調査では、弥生時代の遺構は確認できなかったが、弥生時代後期の土器片が若干量出土した。なお、明確に弥生時代と判断できる石器及び金属製品は確認していない。

1は、有段口縁高坏で、口縁部及び坏部下半以下は欠損しており、外面のみ赤色塗彩である。有段口縁高坏は松原遺跡後期第3段階で出現する。また、松木盆地北部の編年では後期Ⅳ段階から認められる（和田1999）。2は、甕の体部下半から底部の破片で、体部外面に浅い条痕のような調整が残る。3は、椀形口縁高坏で、坏部底部以下は欠損しており、坏部は内外面ともに赤色塗彩である。この類型は中期後半に成立するとされ、松木盆地北部でも後期の様相が明確になる後期Ⅱ段階から認められる。

4・9は壺と判断したが、いずれも残存部位が少なく全容は不明である。4は、口縁部破片でアサガオの花状に開く。9は、頸部に多段平行沈線を施した後、体部にR |L・R| の縄文が施される。

5・6・7・8・10・11は、波状文が施された甕である。このうち口縁部形態がわかる6・7・8・10は、いずれも受け口状を呈し、8は端部が短く直立する。この特徴は、松木盆地南部・北部で中期後半から後期Ⅱ期頃まで認められる（直井1999）。

上記の特徴から、今回の調査で出土した弥生土器をほぼ同一の時期と捉えると、弥生時代後期のうちでも中期の様相が顕著に残ることから、後期前葉に属すると考えられる。

(2) SB1

SB1からは、内面に返りがつき、天井部に宝珠形のつまみをつける須恵器の坏蓋が多く出土し、9点を図示した（12～20）。この器形は、長野道関連報告書では坏蓋Aとされ、古代1期まで主体的に存在する。つまみの残存している個体のうち12・13・15は、扁平な宝珠形を呈し、外面に焼成の際に重ね焼きしたとみられる痕跡が残る。また、20はつまみが欠損しているが、外面にヘラ描きで斜めの平行線を刻む。他の須恵器と比較し、胎土に多くの長石が混入している。SB1出土の坏蓋Aは、直径11.0～11.8cmと13.0～13.6cmに分布し規格的といえる。21は、椀形の坏を伏せた形態に近い坏蓋で口径

第6章 遺物

14.2cm、器高4.4cmと大型の量産品である。外面頂部の調整はヘラケズリで、形状は丸みをおび、端部付近に弱い稜を形成するため蓋としたが、坏身である可能性も残る。長野道関連報告書で坏蓋Dとされ、古墳時代からの伝統的な器種であるが、類例と比較して大型である点がやや特異といえる。

須恵器坏は、2点を図示した(22・23)。いずれも体部が直線的に開く無台の坏で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。22は、口径9.2cmで、成形後に化粧土が施され、底部外面に「×」字状のヘラ描きを確認できる。

須恵器高坏は2点を図示した(25・26)。25は坏部のみで、体部下半が屈曲し強い稜を有する。26は、脚部最大径が11.2cmとなり、長石を多く含む胎土が20と類似する。

27・28は、口縁部下に2条の沈線を有する須恵器碗である。沈線付近が最大径となるように緩やかに丸みを帯びる。金属器模倣形態と考えられる。

土師器甕は、4点を図示した(29～32)。全体が残存している個体がないため、器形は不明確であるが口頸部の形態は多様である。内外面の調整がハケメである点が共通する。

上記の特徴から、SB1出土土器類は松本盆地古代1期に比定できる。

(3) SB2

SB2出土土器類は、3個体を図示した(33～35)。33は、須恵器坏Aの底部で、切り離しは糸切りである。小破片のため不明確であるが、静止糸切りの可能性が高い。なお、回転糸切りは、松本盆地では古代3期から認められる。34は、非口調整の丸底の土師器坏で、内面は黒色処理されている。35は、須恵器坏Aで、口径15.4cmと大きい。松本盆地では、口径15cmを超える須恵器坏Aは、古代3期で認められる。

上記の特徴から、SB2出土土器類は松本盆地古代3期に比定できる。

(4) SB3

SB3出土土器類は、5個体を図示した(36～40)。須恵器坏蓋では宝珠形つまみをもつ坏蓋A(36)と、端部を折り曲げ天井部に扁平なつまみをもつ坏蓋B(37)が見られる。37の坏蓋Bは、口径16.8cmと大型である。38・39は須恵器坏Aで、底部切り離しは回転ヘラ切りである。39はヘラケズリ調整が見られ、胎土が緻密で色調は乳白色である。

上記の特徴から、SB3出土土器類は松本盆地古代2～3期に比定できる。

(5) SB4

SB4は、A区中央の東西流路に切られたため、基本土層16層で検出できた遺構である。このため、遺構の残存状況は悪く、遺物も図示できるものは少ない。41は須恵器坏蓋で、蓋部端部近くにわずかに返りがある。42は有台の須恵器坏Bで、高台はやや外側に張り、復元底径9.4cmを測る。

遺構東壁が調査区外であり、カマドが確認されていないため、出土遺物は少量で残存状況も良くないが、松本盆地古代1～2期の様相を呈すると考えられる。

(6) SB5

SB5 出土土器類は、9個体を図示した(45～53)。45・46は軟質須恵器で、器種は坏Aとなる。48～51は内面に黒色処理を施す黒色土器Aで、底部切り離しは回転系切りである。このうち、50・51では墨書を確認した。50は「千万」と書かれ、51は判読不能である。53は灰軸陶器で、体部下半の4分の1程度を削り調整しており、軸葉はハケ塗りとなっている。器形及び施軸の特徴から、光ヶ丘1号窯式と判断した。この53は見込みに墨跡が観察でき、硯に転用されたことがわかる。

上記の特徴から、SB5 出土土器類は松本盆地古代7期に比定できる。

(7) SB6

SB6 出土土器類は、5個体を図示した(54～58)。54は須恵器横瓶で、口縁部及び体部の破片であるが接合していない。カマド付近及び床面から出土した。55は非口クロ成形の土師器坏で、体部と底部の外周に明瞭な量をもつ。器面調整は、内外面ともに丁寧なミガキである。榎田遺跡では、土師器坏F類とされる。56～58は、土師器甕である。56は小型の土師器甕で、口径15.8cm、体部最大径と口径の差は0.2cmで口縁部が開く形態となる。榎田遺跡では土師器甕B類とされ、榎田Ⅰ～Ⅴ期まで存続し、奈良時代以降も継続して存在する可能性がある。なお、56は内面不着炭化物が良好に残存していたため、放射性年代測定試料を採取し分析を実施した。分析の詳細は、第7章に記載する。57・58は長胴甕で、体部最大径を体部上半にもち、底部は小さくなる。調整は内外面ともにナデを主体とし、榎田遺跡では土師器甕E類とされる。

榎田遺跡報告書によると、土師器坏F類及び土師器甕E類は榎田Ⅴ期にのみ見られるため、SB6 出土土器類は榎田Ⅴ期に比定できる。

(8) SB8

SB8 出土土器類は、2点を図示した(59・60)。59は須恵器坏Aで、底部切り離しは回転系切りである。60は土師器甕で、ナデの後にハケメ調整しており、底部に木葉痕がある。

SB8からは出土個体数が少ないため不確定ではあるが、出土土器類は松本盆地古代2～3期の様相を呈すると考えられる。

(9) SX1

SX1は、A区北壁にかかる焼土が主体の遺構である。ここから出土した土器類は、2点を図示した(61・62)。61は土師器甕で、外面は縦方向のハケメ調整で単位は短い。内面調整では、口縁部下に横方向のハケメ調整を施した後、体部内面に縦方向のナデを施している。松本盆地では、ハケメ調整の土師器甕Bは古代2～3期に見られ、内面をナデとハケメで調整する土師器甕は3～4期に見られるため、SX1 出土土器は、松本盆地古代3期に属すると考えられる。

2 金属製品

(1) SB 1

63～69は、SB 1 出土である。このうち63～65は刀子で、63は、切先を欠損しているが、ほぼ完形で棟側と刃側共に関を持たない。65は、切先を欠損した身部で、使用による摩耗が確認できる。また、63・64の基部には木質片が付着している。66は、種別不明の製品である。厚さ1.5mm程度の板状の破片で一方からの穿孔が確認できる。67～69は、鉄鎌である。67の長頸鎌は、茎の端部と身部を欠損している。残存している篋被部分の中央付近の断面は四角形であるのに対し、身部側の端部断面は楕円形である。また、棘状の篋被関を持つ。68の長頸鎌は、篋被部分が湾曲しており、基部は欠損している。67と同様に身部側の端部断面は楕円形を呈している。69は、基部のみ残存している。

(2) SB 3

70は、SB 3 からの出土で刀子の切先片である。長さ2.3cm、幅1.3cm、重さ2.1gで、今回出土した切先付近が残存する刀子に比べて、身部の幅がやや広い。

(3) SB 4

71～74は、SB 4 出土である。71・72は刀子で、71は、ほぼ完形で関を持たず鉦から切先に向かって徐々に身部の幅が狭くなる。また、基部に木質片が付着している。72は、身部と基部の両端を欠損している。棟側と刃側に関を持っているが、棟側はやや不明瞭である。73の環状鉄製品は、完形では楕円形を呈すると考えられるが、その約3分の2程度が残存している。74の釘は、断面形は角の丸い方形を呈し、長さは7.2cmである。

(4) SB 5

75は、SB 5 出土の釘で、頭部整形は基部上端を叩き延ばした後に曲げられている。先端部は欠損しており、残存長は7.0cmである。

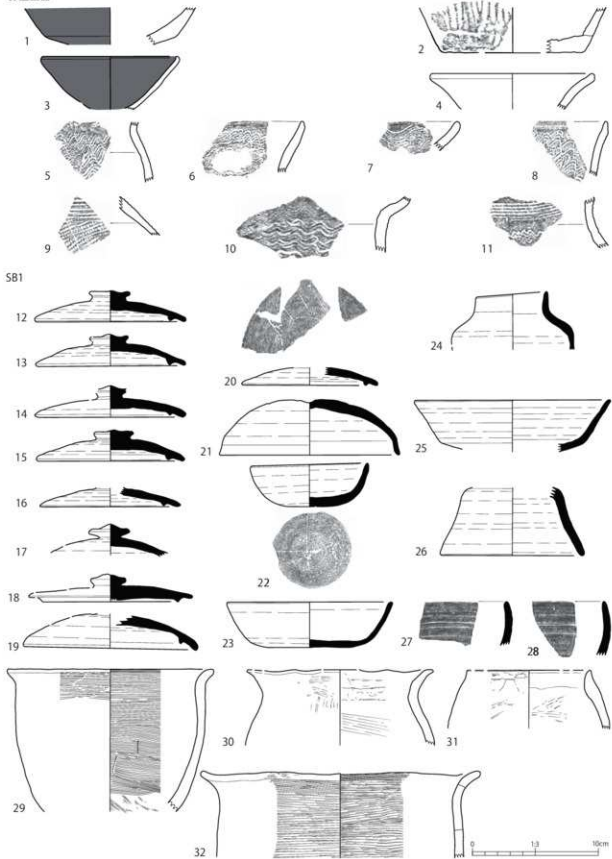
(5) 遺構外

76・77は遺構外から出土した刀子である。77は、完形で棟側に関を持ち、身部の中央付近では、使用による摩耗が確認できる。

3 石製品

78は、SB 1 北西隅の床面出土の砥石である。石材は砂岩で、最大長30.9cm、最大幅15.5cm、最大厚3.2cm、重さ2.2kg、平面形状は、ほぼ長方形を呈し、その短辺にあたる側面以外の全ての面が使用されている。研磨の方向は使用面が荒れていることから不明だが、磨り減り方は、ほぼ平坦で大きな凹み等は確認できない。

弥生土器



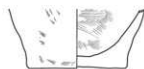
第25図 出土遺物 1

第6章 遺物

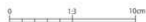
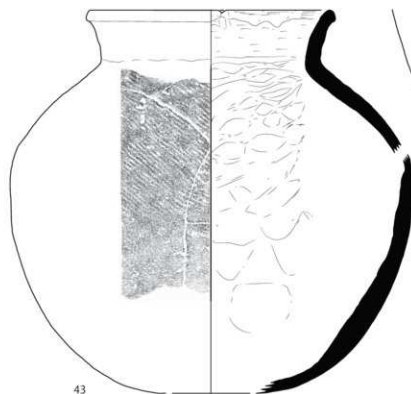
SB2



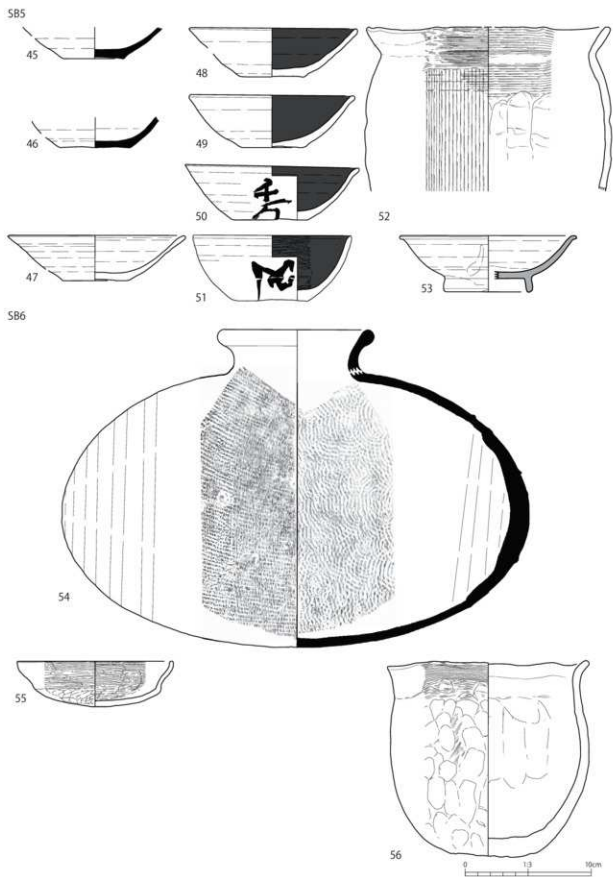
SB3



SB4

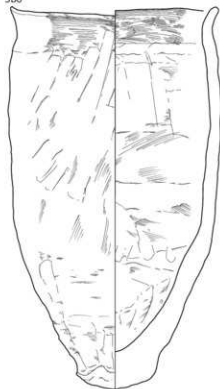


第26圖 出土遺物 2



第27回 出土遺物 3

SB6



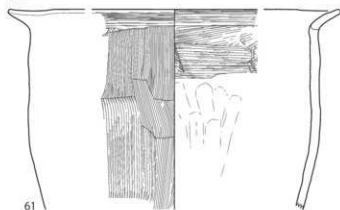
57

SB8

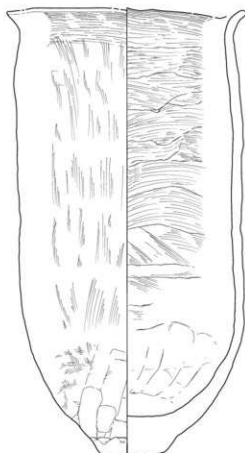


59

SX1



61



58



60

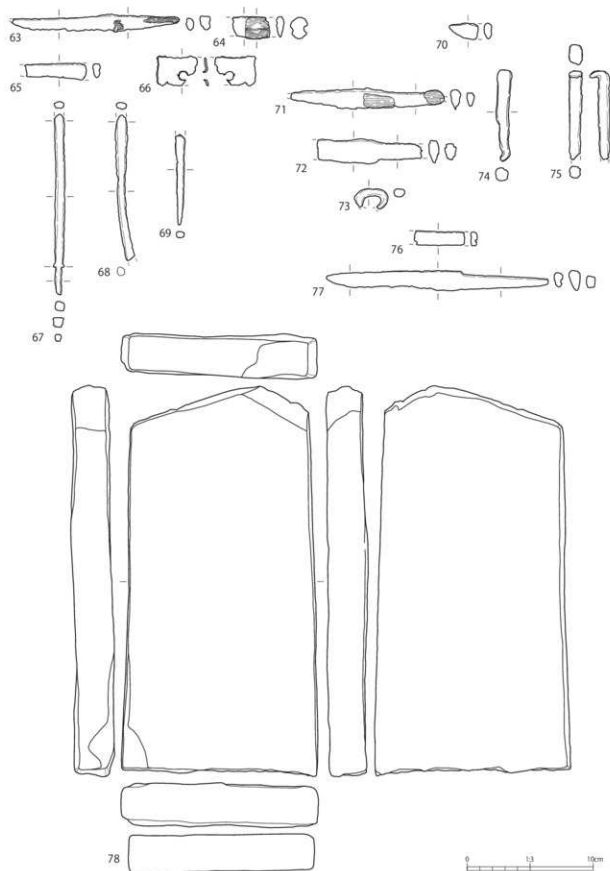


62



0 1.3 10cm

第28図 出土遺物 4



第29図 出土遺物 5

第6章 遺物

第3表 弥生土器観察表

No.	遺構	層位	器種	残存部位	口径 (cm)	胴部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
											外面	内面	底部
1	SB 2	覆土	高坏	坏部	不明	不明	(13.6)	坏部	不明	(2.9)	ナデ+赤彩	ナデ	不明
2	P22	覆土	甕	体部下半~底部	不明	不明	(14.8)	体部	(10.8)	(3.6)	工具ナデ	ナデ	ナデ
3	A1K16層	覆土	高坏	坏部	(10.8)	不明	(11.0)	口縁部	不明	(4.2)	ミガキ+赤彩	ナデ+赤彩	不明
4	A1K13層	覆土	壺	口縁部~胴部	(12.6)	不明	(13.0)	口縁部	不明	(2.8)	ナデ	ナデ	不明
5	SB 1	覆土	甕	胴部~体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	波状文	ハケメ	不明
6	SB 2	覆土	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+波状文	ナデ	不明
7	SB 3	覆土	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+波状文	ナデ	不明
8	P 9	覆土	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+波状文	ナデ	不明
9	P47	覆土	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	沈線+縄文	ナデ	不明
10	A1K13層	覆土	甕	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	波状文	ナデ	不明
11	A1K16層	覆土	甕	胴部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	沈線+波状文	ナデ	不明

() は残存している部分の法量。

第4表 奈良・平安時代土器類観察表

No.	遺構名	層位	種類	器種	残存部位	口径 (cm)	胴部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
												外面	内面	底部
12	SB 1	床面	須恵器	环蓋	体部	11.7	-	12.0	口縁部	-	2.5	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
13	SB 1	床面	須恵器	环蓋	体部	11.8	-	12.0	口縁部	-	2.5	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
14	SB 1	床面	須恵器	环蓋	体部	(11.4)	-	(12.0)	口縁部	-	2.5	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
15	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	11.5	-	11.8	口縁部	-	2.5	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
16	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	(11.0)	-	(11.2)	口縁部	-	(1.5)	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
17	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	不明	-	不明	不明	-	(2.5)	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
18	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	13.0	-	13.0	口縁部	-	2.2	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
19	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	13.6	-	13.9	口縁部	-	(2.9)	ロクロナデ+化 粧土+回転ヘラ ケズリ	ロクロナデ	-
20	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	10.6	-	10.6	口縁部	-	(1.4)	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
21	SB 1	覆土	須恵器	环蓋	体部	14.2	-	14.4	体部	-	4.4	ロクロナデ+回転 ヘラケ切り	ロクロナデ	-
22	SB 1	床面	須恵器	环	口縁部~底部	9.2	-	9.4	口縁部	3.1	3.4	ロクロナデ+化 粧土	ロクロナデ+化 粧土	回転ヘラケズリ
23	SB 1	床面	須恵器	环	口縁部~底部	(13.0)	0.0	(13.2)	口縁部	5.9	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ
24	SB 1	覆土	須恵器	短頸壺	口縁部~体部上半	5.6	(6.1)	(9.7)	体部	不明	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
25	SB 1	覆土	須恵器	高坏	口縁部~体部上半	15.4	不明	15.6	口縁部	不明	(4.1)	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	不明
26	SB 1	覆土	須恵器	脚	脚部	不明	-	11.2	底部	11.2	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
27	SB 1	覆土	須恵器	瓶	口縁部	不明	-	不明	不明	不明	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
28	SB 1	覆土	須恵器	瓶	口縁部	不明	-	不明	不明	不明	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
29	SB 1	床面	土師器	甕	口縁部~体部下 半	(16.2)	(15.1)	(16.4)	口縁部	不明	(11.3)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	不明
30	SB 1	覆土	土師器	甕	口縁部~体部上半	(14.6)	-	(15.0)	口縁部	不明	(6.0)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	不明
31	SB 1	覆土	土師器	甕	口縁部~体部上半	(9.6)	-	(12.8)	口縁部	不明	(5.6)	ナデ+指頭(痕 ハケメ)	ナデ+ハケメ	不明
32	SB 1	覆土	土師器	甕	口縁部~体部上半	(21.8)	(19.2)	(22.2)	口縁部	不明	(6.9)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	不明
33	SB 2	覆土	須恵器	环	体部下半~底部	不明	-	不明	不明	(6.2)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	静止表面切
34	SB 2	覆土	土師器	环	体部下半~底部	不明	-	不明	不明	(3.0)	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ+灰色+ミ ナデ
35	SB 2	覆土	須恵器	环	口縁部~底部	(15.4)	-	(15.6)	口縁部	7.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ
36	SB 3	覆土	須恵器	环蓋	体部上半	不明	-	不明	不明	-	(2.0)	ロクロナデ+回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	-
37	SB 3	覆土	須恵器	环蓋	体部下半	(16.8)	-	(17.4)	口縁部	不明	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
38	SB 3	床面	須恵器	环	口縁部~底部	(13.8)	-	(14.0)	口縁部	(7.0)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケ切り
39	SB 3	覆土	須恵器	环	口縁部~底部	(12.0)	-	(12.2)	口縁部	(6.2)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ
40	SB 3	覆土	土師器	甕	体部下半~底部	不明	不明	不明	不明	(7.6)	(4.7)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	水雲直
41	SB 4	覆土	須恵器	环蓋	口縁部~体部	(13.8)	-	(14.0)	口縁部	不明	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
42	SB 4	覆土	須恵器	环	体部下半~底部	不明	不明	不明	不明	(9.4)	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケ切り

No.	遺物名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	胴部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			
												外面	内面	底部	
43	SB4	覆土	須恵器	甕	口縁部～底部	(19.2)	(17.4)	(32.0)	(体部)	(8.2)	(30.3)	口縁口ロナデ 体部タナキ	口縁口ロナデ 体部当具類+ナ デ	不明	
44	SB4	覆土	土師器	甕	体部下～底部	不明	不明	不明	不明	(7.4)	(10.9)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ+ 工具	ナデ	
45	SB3	覆土	軟質須恵器	杯	体部下～底部	不明	-	(11.0)	(体部)	4.4	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
46	SB3	覆土	軟質須恵器	杯	体部下～底部	不明	-	(10.0)	(体部)	5.1	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
47	SB3	床面	土師器	杯	口縁部～底部	(13.7)	-	(14.2)	(口縁部)	5.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
48	SB3	覆土	土師器	杯	口縁部～底部	13.2	-	13.9	(口縁部)	5.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ+黒 色	回転糸切り	
49	SB3	覆土	土師器	杯	口縁部～底部	13.0	-	13.2	(口縁部)	4.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ+黒 色+ミガキ	回転糸切り	
50	SB3	覆土	土師器	杯	口縁部～底部	13.7	-	13.8	(口縁部)	5.8	4.4	ロクロナデ+黒 色	ロクロナデ+黒 色+ミガキ	回転糸切り	
51	SB3	覆土	土師器	杯	口縁部～底部	(12.5)	-	(12.6)	(口縁部)	5.6	5.2	ロクロナデ+黒 色	ロクロナデ+黒 色+ミガキ	回転糸切り	
52	SB3	覆土	土師器	甕	口縁部～体部上半	(19.0)	(17.0)	(19.5)	(体部)	不明	(13.0)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ+ 工具	不明	
53	SB3	覆土	灰輪陶器	碗	口縁部～底部	(13.8)	-	(14.0)	(口縁部)	6.8	4.5	ロクロナデ+灰 輪	ロクロナデ+灰 輪	回転糸切り	
54	SB6	カマド	須恵器	横瓶	口縁部～底部	(11.6)	(9.8)	(32.2)	(体部)	-	(25.1)	口縁口ロナデ 体部口ロナデ +タナキ	口縁口ロナデ 体部口ロナデ +当具類		
55	SB6	覆土	土師器	杯	口縁部～底部	12.2	-	12.4	(口縁部)	7.0	3.6	ケズリ+黒色+ ミガキ	ケズリ+黒色+ ミガキ	ヘラケズリ+ミ ガキ	
56	SB6	床面	土師器	甕	口縁部～底部	15.8	14.7	16.0	(口縁部)	6.7	15.5	ナデ+指頭圧 +ハケメ	ナデ+工具	オヤエ	
57	SB6	床面	土師器	甕	口縁部～底部	16.2	15.5	16.8	体部	6.0	30.4	ナデ+ハケメ+ 工具	ナデ+ハケメ+ 工具	本蓋痕	
58	SB6	覆土	土師器	甕	口縁部～底部	18.8	16.9	19.0	(口縁部)	5.0	35.6	ナデ+ハケメ+ 工具	ナデ+ハケメ+ 工具	本蓋痕?	
59	SB8	覆土	須恵器	杯	口縁部～底部	(12.6)	-	(12.8)	(口縁部)	7.5	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+回 転ハケズリ	
60	SB8	覆土	土師器	甕	体部下～底部	不明	不明	(11.6)	(体部)	(8.4)	(4.8)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	本蓋痕	
61	SX1	覆土	土師器	甕	口縁部～体部上半	(26.0)	(22.8)	(26.4)	(口縁部)	不明	(15.9)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ+ 工具	不明	
62	SX1	覆土	土師器	甕	体部下～底部	不明	不明	(13.4)	(体部)	11.6	(3.2)	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	本蓋痕	

() は残存している部分の法量。

第5表 金属製品観察表

No.	遺構	層位	名称	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	備考
63	SB1	覆土	刀子	鉄	13.3	1.4	15.7	木質片付着
64	SB1	覆土	刀子	鉄	2.8	1.7	7.8	木質片付着
65	SB1	覆土	刀子	鉄	4.8	1.3	6.6	
66	SB1	覆土	不明	鉄	2.3	3.2	2.6	
67	SB1	覆土	長頸鎌	鉄	14.3	0.9	14.8	
68	SB1	覆土	長頸鎌	鉄	11.4	0.8	12.2	
69	SB1	覆土	鉄鎌	鉄	7.1	0.8	4.6	
70	SB3	覆土	刀子	鉄	2.3	1.3	2.1	
71	SB5	覆土	刀子	鉄	12.2	1.7	18.8	木質片付着
72	SB4	覆土	刀子	鉄	8.2	2.0	20.7	
73	SB4	覆土	環状鉄製品	鉄	2.6	1.5	3.2	
74	SB4	覆土	釘	鉄	7.2	1.2	13.0	
75	SB5	覆土	釘	鉄	7.0	1.0	11.5	
76	A区	13層検出面	刀子	鉄	4.0	1.1	3.7	
77	A区	13層検出面	刀子	鉄	17.6	1.6	28.8	

第6表 石製品観察表

No.	遺構名	層位	名称	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (kg)	備考
78	SB1	床	砥石	砂岩	30.9	15.5	3.2	2.2	

第7章 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

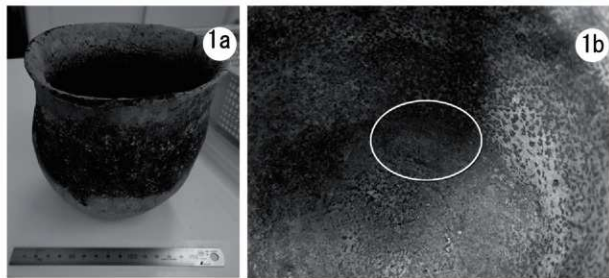
伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadize・黒沼保子

(1) はじめに

安曇野市に所在する穂高神社境内遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、住居跡SB6のカマドから出土した炭化材（試料No.5: PLD-33270）と、同じく住居跡SB6のSNベルトから出土した土器の内面に付着していた炭化物（試料No.6: PLD-33271）の、合計2点である。試料No.5の炭化材は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。SB6の時期は、古墳時代後期と推定されている。



1a：第27図56の土師器甕、1b：土器付着炭化物の採取箇所

第30図 土器付着炭化物（PLD-33271）の採取箇所

測定試料の情報、調製データは第7表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 L5SDH）を用いて測定した。得られた ^{13}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第7表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33270	遺構：SB6 位置：カマド 試料No.5 現場No.7	種類：炭化材（ハンノキ属ハンノキ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33271	遺構：SB6 位置：SNベルト 試料No.6 第27図56	種類：土器付着物・内面（おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）

(3) 結果

第8表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第31図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ：IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年較正範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年較正範囲であり、同様に2 σ 暦年較正範囲は95.4%信頼限界の暦年較正範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年較正が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第8表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-33270 試料No.5	-26.89 \pm 0.18	1481 \pm 18	1480 \pm 20	566-606 cal AD (68.2%)	548-630 cal AD (95.4%)
PLD-33271 試料No.6	-28.76 \pm 0.19	1591 \pm 19	1590 \pm 20	420-434 cal AD (12.0%) 454-470 cal AD (10.8%) 487-534 cal AD (45.4%)	416-537 cal AD (95.4%)

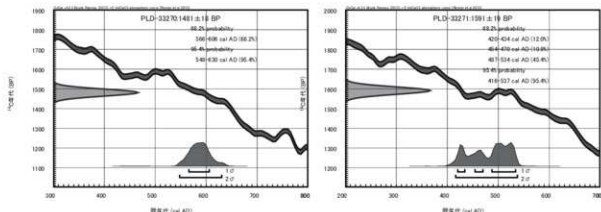
(4) 考察

以下、住居跡SB6から出土した各試料の暦年較正結果のうち、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、結果を整理する。なお、古墳時代の暦年代については赤塚（2009）を参照した。

カマド出土の炭化材（試料No.5:PLD-33270）は、548-630 cal AD（95.4%）であった。これは6世紀中頃～7世紀前半で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

SNベルトから出土した土器の内面付着炭化物（試料No.6:PLD-33271）は、416-537 cal AD（95.4%）であった。これは5世紀前半～6世紀前半で、古墳時代中期～後期に相当する。

試料No.5と試料No.6は年代測定結果に多少の時期のずれがみられたが、調査所見によるSB6の推定時期である古墳時代後期に対して整合的な結果であった。



第31図 暦年較正結果

引用・参考文献

- 赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代。日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集」：14-20。日本文化財科学会。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20。日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869–1887.

2 穂高神社境内遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
黒沼保子

(1) はじめに

安曇野市に所在する穂高神社境内遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、試料のうち1点については放射性炭素年代測定も行われている（第7章1参照）。

(2) 試料と方法

試料は住居跡SB1とSB4、SB5、SB6から出土した炭化材5点である。遺構の時期は、住居跡SB1とSB4、SB5は奈良時代もしくは平安時代、SB6は古墳時代後期と推測されている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパックで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、針葉樹のヒノキと、広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属（以下、ハンノキ亜属）とヒサカキ、単子葉類のイネ科草本の、合計4分類群が確認された。結果の一覧を第9表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

第9表 樹種同定結果

試料No.	現場No.	出土位置	樹種	形状・部位	サイズ	年代測定番号
試料1	1	SB1 SE区	ヒノキ	破片	<2cm角	-
試料2	4	SB4 SW区	イネ科	程	<1.5cm角	-
試料3	5	SB5 カマド付近	ヒサカキ	破片	<3cm角	-
試料4	6	SB4 SE区	イネ科	程	幅0.5cm	-
試料5	7	SB6 カマド	ハンノキ属ハンノキ亜属	破片	<2cm角	PLD-33270

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第32図 1a-1c (試料1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(2) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 第32図 2a-2c (試料5)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10~20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど7種がある。材は全般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

(3) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. var. *japonica* モッコク科 第32図 3a-3c (試料3)

小径で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40段以上となる。放射組織は1~4列幅で、上下に直立もしくは方形細胞が数個連なる異性である。

ヒサカキは亜熱帯~暖帯に生育する常緑低木または小高木である。材の強度は中庸だが、割裂は困難である。

(4) イネ科草本 Poaceae Herb 第32図 4a (試料2)、5a (試料4)

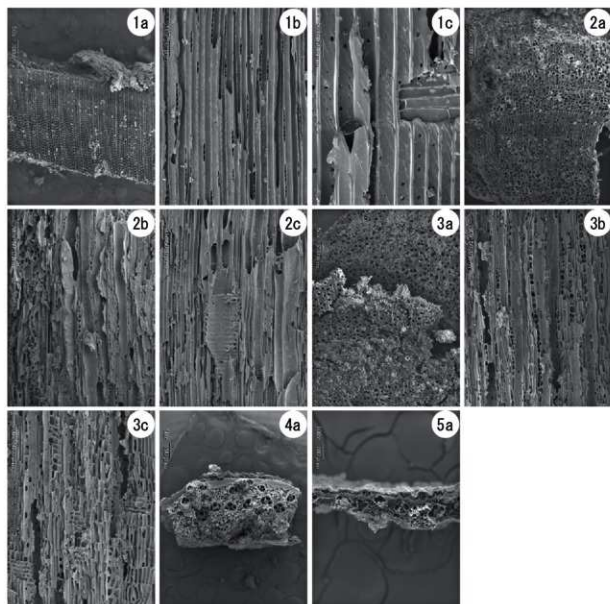
柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

(4) 考察

SB1のSE区ではヒノキ、SB4のSW区とSE区ではイネ科草本、SB5のカマド付近ではヒサカキ、SB6のカマドではハンノキ亜属が確認された。いずれも用途は不明であるが、遺跡周辺に生育していた植物が利用されたと推測される。なお、SB5のカマド付近出土のヒサカキと、SB6のカマド出土のハンノキ亜属は、燃料材の可能性が考えられる。

参考文献

平井信二(1996)木の百科, 394p, 朝倉書店。



1a-1c. ヒノキ (試料1)、2a-2c. ハンノキ属ハンノキ亜属 (試料5)、3a-3c. ヒサカキ (試料3)、
4a. イネ科 (試料2)、5a. イネ科 (試料4)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第32図 穂高神社境内遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第8章 調査の総括

今回の調査では新徳高支所建設事業に際し、延調査面積636㎡の発掘を実施した。調査の結果、地表下約2.2mに古墳時代後期から奈良・平安時代集落跡の存在を確認した。

1 堆積状況と遺構の関係

遺跡確認の端緒となった徳高神社参道での遺物発見以来、今日まで徳高神社境内遺跡において遺構の確認、遺物の採集記録等がなかった原因として、遺構面が深いことが挙げられる。A区北東隅の基本土層観察地点では、奈良・平安時代の遺構構築面である13層は地表下約220cm、16層は地表下約260cmを測った。B区でもほぼ同様の堆積状況である。調査地は、これまで学校敷地や公共施設用地として利用されており、地表下100cm程度は近代以降の造成土（1～2層）であった。この100cmを考慮しても、3層上面から測った奈良・平安時代の遺構深度は約1.5mとなる。

穂高地域において、扇状地扇央の水に乏しい土地では、烏川扇状地の自然流を巧みに利用して水利を得てきた（徳高町教委2001a）。このような水路は主に東流しており「縦堰」と呼ばれ、江戸時代以降に整備されてきた北流する「横堰」と区別される。縦堰は半自然流であるため、これまでに氾濫することが度々あったようで、今回の調査でもA区中央で東西方向の旧流路を確認した。この旧流路によってSB4の中央部分が流失している。今回の調査地は、歴史的に本沢及び芝沢の影響を受けているため、A区中央の流路跡もいずれかの水系と考えられる。

このように、穂高地域の扇央においても半自然流の氾濫等によって遺構が流失した例、または遺構上に砂礫が堆積した例は藤塚遺跡（安曇野市教委2009）、芝宮南遺跡（安曇野市教委2016）で確認されている。対照的に、扇端付近では、堆積自体が厚い。等々力町巾上巾下遺跡では、穂高病院建設の際の発掘調査で奈良時代の遺構深度が地表下2.3m（徳高町教委未報告）、同職員駐車場地点での弥生時代後期遺構面が地表下1.8mと深い（安曇野市教委2018）。奈良・平安時代の遺構深度を比較すると、烏川扇状地南半の馬場街道遺跡、八ツ口遺跡、三枚橋遺跡等での遺構検出面は地表下0.8～1m程度が多いのに対して、北半の穂高神社境内遺跡、等々力町巾上巾下遺跡等では遺構深度が深い傾向がある。この傾向については、今後も継続して土層観察の調査成果を蓄積するとともに、問題意識をもった記録作成等を行い解明していく必要がある。

2 弥生時代集落跡存在の可能性

今回の発掘調査では、遺構外から弥生時代後期前葉の土器片が出土した。精査の結果、弥生時代に属する遺構は確認できなかったが、今回の調査地点で弥生時代の遺物を確認したことには大きな意味がある。

そもそも、穂高神社境内遺跡の存在が認められる契機となった遺物は、穂高神社参道から出土した扁片刃石斧と朱彩土師器の器台であった（徳高町誌編纂委1991）。このため、周辺に弥生時代集落跡

の存在が推定されていたものの、今回の発掘調査まで遺構・遺物の確認はされてこなかった。今回の発掘調査で、穂高神社から約200m南東に離れるものの、弥生時代後期の土器が確認されたことで、周辺にも同時期の集落跡が存在する可能性が強まったといえる。また今回の調査では、古墳時代初期の遺構・遺物は確認されなかったため、この時期における集落跡等の存在確認については課題が持ち越されたことになる。

近年、穂高地域では弥生時代中期から後期にかけての遺構・遺物の確認が相次いでいる。これらの成果を含め、現在までに安曇野市内において発掘等の調査によって同時代の遺構等が確認された遺跡を第10表にまとめた。穂高地域での弥生時代集落跡の分布は、主として烏川扇状地扇央から扇端となっている。このうち扇央で確認された遺跡は、自然流または半自然流の流路付近に位置する。これら扇央所在の遺跡の調査事例は少ないが、遺物出土層までの堆積は1m程度で、土器片は完形に復元できる個体が少なく、遺構が確認できない、または不明瞭であるという特徴がある。扇端に所在する等々力町巾上巾下遺跡は、湧水のある段丘付近に立地する。ここでは、平成28年度の調査によって地表下1.8mから弥生時代後期の堅穴建物跡が確認された。

なお、穂高地域以外では、豊科田沢の町田遺跡、小瀬幅遺跡、三郷小倉の黒沢川右岸遺跡、三郷温の堂原遺跡、明科南陸郷のほうろく屋敷遺跡、光道跡群北村遺跡で弥生時代中期から後期の遺構・遺物が確認されている。

3 穂高神社境内遺跡の古代集落

穂高神社境内遺跡第1次発掘調査において、古墳時代後期及び奈良時代、平安時代の堅穴建物跡を

第10表 安曇野市内の弥生時代中・後期遺跡

所在地	遺跡	立地	調査	内容	文献
豊科田沢	町田遺跡	小河川沿い	H10発掘	弥生時代中期後半の堅穴建物跡10棟、土器、石器	豊科町教委1999
豊科田沢	小瀬幅遺跡	小河川沿い	H29発掘	弥生時代中期の土器破片	報告作成中
穂高	南原遺跡	小河川沿い	H9試掘	弥生時代中期前半の土器片	穂高町教委2001
穂高	等々力町巾上巾下遺跡	湧水付近	H28発掘	弥生時代後期の堅穴建物跡1棟、土器	安曇野市教委2018
穂高	藤塚遺跡	小河川沿い	H28試掘	弥生時代中期前半の土器片、石器	安曇野市教委2016
穂高	芝宮南遺跡	小河川沿い	H26発掘	弥生時代中期前半の土器片、遺構不明瞭	安曇野市教委2018
穂高	三枚橋遺跡	小河川沿い	H13発掘 H20発掘	弥生時代後期の土器、堅穴建物跡（不明瞭）	長野県考古学会弥生部会編1999 安曇野市教委2010
穂高	八ッ口遺跡	小河川沿い	H20発掘	弥生時代後期の土器	安曇野市教委2010
三郷小倉	黒沢川右岸遺跡	黒沢川右岸	S58発掘	弥生時代中期後半の堅穴建物跡2棟、土器、石器	三郷村教委1988
三郷温	堂原遺跡	小河川沿い	採集	弥生時代中期後半の土器、石器	三郷村教委1999
明科南陸郷	ほうろく屋敷遺跡	犀川左岸	H1発掘	弥生時代後期の堅穴建物跡1棟、土器	明科町教委1991
明科光	光道跡群北村遺跡	犀川右岸	S62～63発掘	SB511弥生時代最終期の堅穴建物跡	長野県埋文センター 1993

確認し、集落跡の存在を明らかにしたことは大きな成果といえる。

古墳時代後期のSB6は、出土土器類から廃絶時期を榎田遺跡V期とした。榎田遺跡報告書では、V期新相を7世紀第3四半期においている。穂高地域では、この時期の遺構の確認例は多くないが、馬場街道遺跡6号住居址（穂高町教委1987）等の例がある。市内では明科遺跡群栄町遺跡において、平成23年度の第3次発掘調査で同時期の堅穴建物跡13棟（安曇野市教委2013）、平成24年度の第4次発掘調査で堅穴建物跡2棟（安曇野市教委2014）が確認され、古墳時代後期の集落跡の存在が明らかになった。なお、この時期に先行する古墳時代中期の集落跡は、矢原五輪畑遺跡、藤塚遺跡で発掘調査が実施されている（穂高町誌編纂委1991）。また、SB6出土土器器裏の内面付着炭化物を試料として放射性炭素年代測定を実施したところ、416-537 cal AD (95.4%)の年代値を得た。共存土器を古墳時代後期と考えたため、年代的にやや先行する結果であるが、B区調査区自体が狭小であるため、周辺の未調査範囲に5～6世紀の集落跡が存在する可能性も残されている。

松本盆地古代1期に比定されるSB1からは、返りのある須恵器杯蓋Aがまとまって出土し、9点を図示した。SB1は、今回の調査で確認した遺構としては、SB6に後続し、7世紀後葉から8世紀初頭と考えられる。土器組成上の特徴としては、須恵器杯蓋の出土点数に比して坏身が少ない。また、口径14.2cmの坏蓋(21)や、在地産にない胎土と焼成の特徴を持つ須恵器坏(22)もある。当該期の堅穴建物跡出土資料の土器組成や特徴は、未だ明らかになっていないといえなため、調査事例の増加が望まれる。金属製品で、刀子と長須鎌が良好な状態で出土していることも本遺構で特筆すべき点である。穂高地域でSB1と同時期の遺構は、馬場街道遺跡8号住居址がある（穂高町教委1987）。明科地域では、光遺跡群北村遺跡I群（長野県埋文センター1993）、明科遺跡群栄町遺跡（第3次）SB7覆土4層上部（安曇野市教委2013）のほか、明科遺跡群明科廃寺（明科町教委2000）及び桜坂古窯跡（明科町教委1998）が同時期とされる。

SB5からは、軟質須恵器、墨書を有する黒色土器A、灰軸陶器の転用硯が出土しており、松本盆地古代7期の特徴を持つ。53の灰軸陶器は光ヶ丘1号窯式の特徴を有し、遺構年代も9世紀中～後葉と考えられる。また、金属製品では鉄釘が出土しており、建造物に使用されていた可能性もある。穂高地域では、馬場街道遺跡15号住居址（穂高町教委1987）、ハツ口遺跡（第2次）SB7（安曇野市教委2010）でSB5と同時期の遺構が確認されており、馬場街道遺跡5号住居址（穂高町教委1987）が後続する。

以上、今回の発掘調査で確認した特徴的な遺構について記載した。上記以外の時代の遺構等は、今回の調査では確認していない。近隣の遺跡では、8世紀の遺構は既に確認されているため、複数の遺跡を包括して広範囲に集落の変遷を捉えると、この遺跡一帯で古墳時代後期から平安時代末まで集落が基本的に存続していると考えられる。ただし、10世紀代には集落の断絶が見られるなど、未解明な点は残されている。今回の調査で確認されたように、烏川扇状地では地表下2m以深に遺構等が残存していることが判明しつつあるため、今後も継続的に調査成果を蓄積すること及び過去の調査成果を再整理することが重要になってくる。



1 調査区全景16層完掘（上が東）



2 A区13層完掘（上が東）



3 A区16層完掘（上が東）



4 B区完掘（上が南）



5 調査前 (北から)



6 A区東壁セクション



7 SB1完掘 (西から)



8 SB1カマド遺物出土状況



9 SB2完掘 (西から)



10 SB3完掘 (東から)



11 SB4完掘 (西から)



12 SB5完掘 (東から)



13 SB6完掘(東から)



14 SB6カマド完掘(東から)



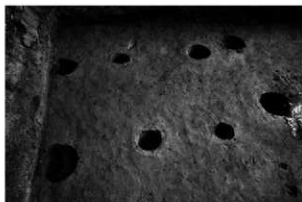
15 SB6遺物出土状況



16 SB8完掘(東から)



17 ST1(北から)



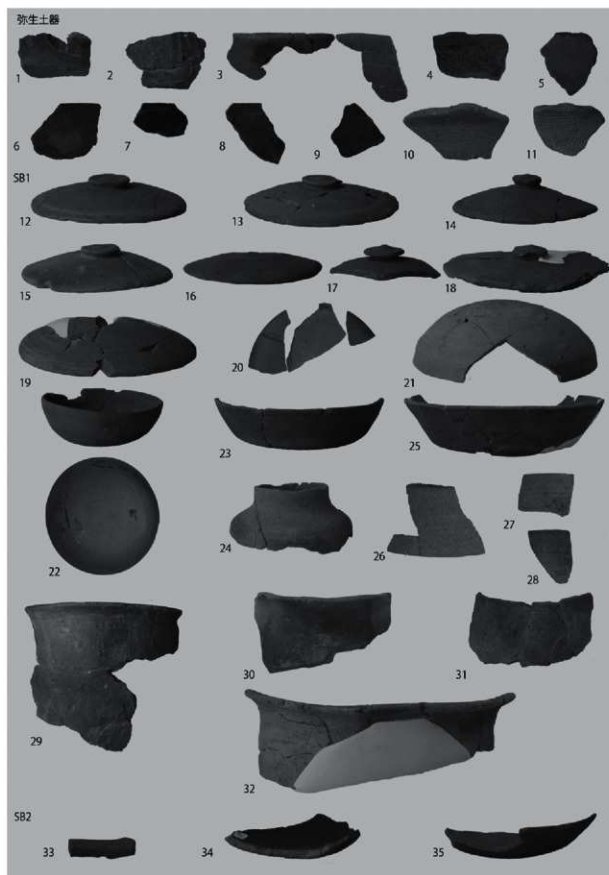
18 ST2(北から)



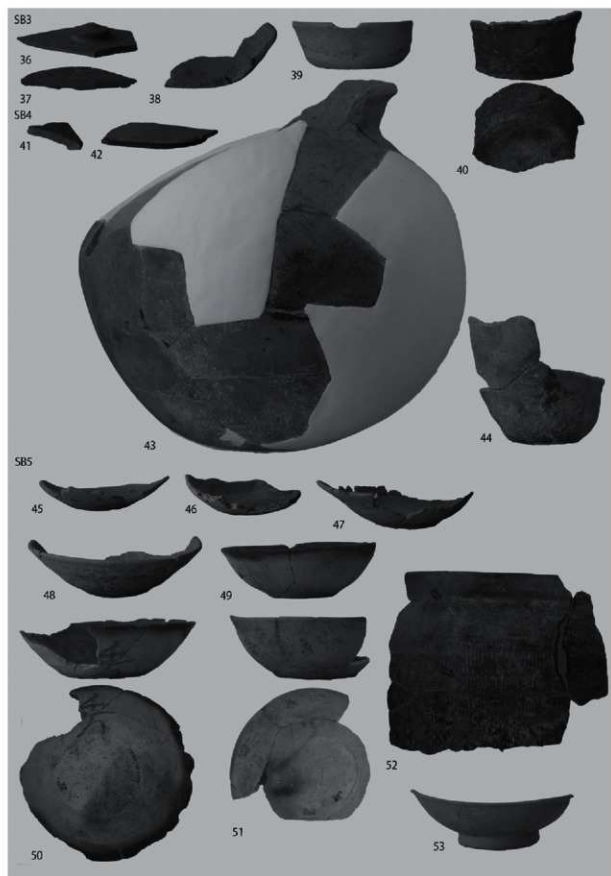
19 ST3(北から)



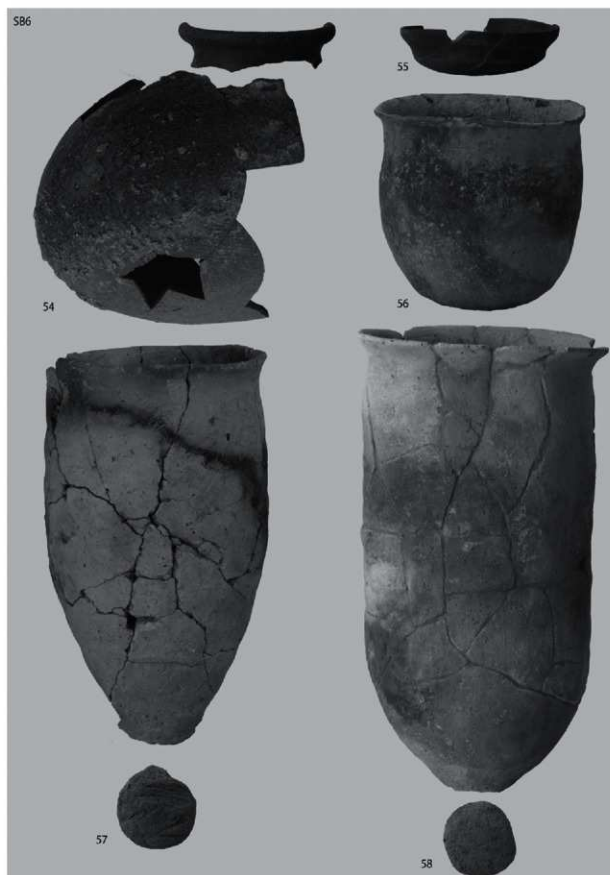
20 調査後現況(平成28年)(南東から)



21 出土遺物 1



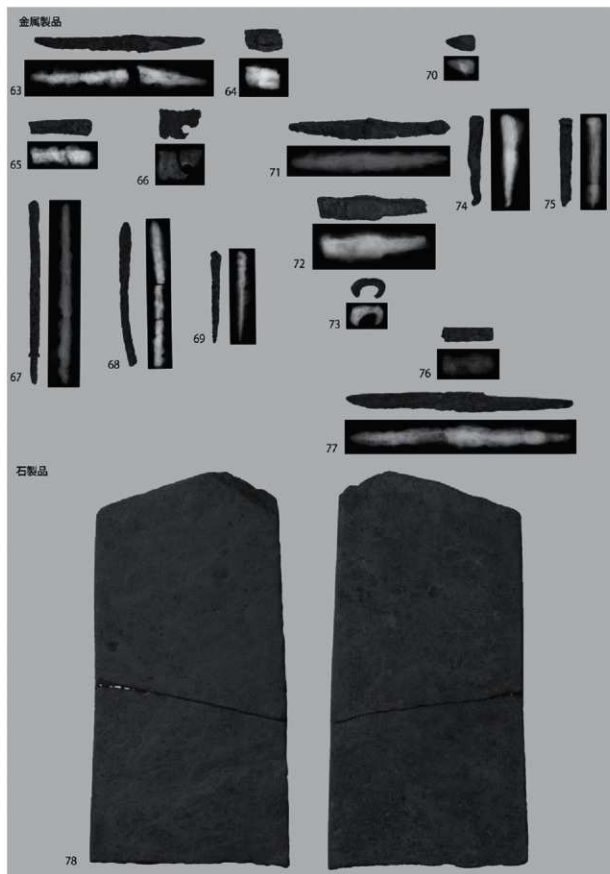
22 出土遺物 2



23 出土遺物 3



24 出土遺物 4



25 出土遺物 5

引用・参考文献（五十音順）

- 明科町教育委員会 1991 「はろく屋敷遺跡—川西地区県は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—」明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1998 「桜坂古窯址—主要地方道徳高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告—」明科町の埋蔵文化財第5集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 「明科院寺址—個人住宅建替に伴う緊急発掘調査報告書—」明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2009 「三枚橋・藤塚遺跡—安曇野市徳高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」安曇野市の埋蔵文化財第2集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2010 「平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—八口遺跡・三枚橋遺跡—」安曇野市の埋蔵文化財第3集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2013 「平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—明科遺跡群古殿屋敷（第1次）・明科遺跡群栄町遺跡（第3次）—」安曇野市の埋蔵文化財第6集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2014 「平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—明科遺跡群栄町遺跡（第4次）—」安曇野市の埋蔵文化財第7集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2015 「平成25年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—徳高古墳群G1号墳（原古墳）第3次・第4次発掘調査—」安曇野市の埋蔵文化財第8集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2016 「芝宮南遺跡—徳高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」安曇野市の埋蔵文化財第10集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2017 「平成27年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第11集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2018 「平成28年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第15集 安曇野市教育委員会
- 小穴喜一 1987 「土と水から歴史を探る—古代・中世の用水路を軸として—」信海書籍出版センター
- 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会 pp.97-158
- 東郷正美・池田安隆・今泉俊文・澤祥・松田信尚 1999 「1：25,000 都市圏活断層図「信濃池田」 国土地理院
- 鳥居龍藏 1924 「諏訪史」第1巻 信濃教育会諏訪部会
- 豊科町教育委員会 1999 「町田遺跡—都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」豊科町教育委員会
- 直井雅尚 1999 「松本平南部における弥生中期後半～後期の土器編年」『99シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨』長野県考古学会弥生部会 pp.30-39
- 長野県編 1988 「長野県史 考古資料編」全1巻（4）遺構・遺物 長野県史刊行会
- 長野県考古学会弥生部会編 1999 「長野県弥生土器集成図録」長野県考古学会弥生部会
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3—松原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36 長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12—長野市内その10—榎田遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37 長野県埋蔵文化財センター
- 原山智・大塚勉・酒井潤一・小坂共栄・駒澤正夫 2009 「松本地域の地質」地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）産総研地質調査総合センター
- 徳高町教育委員会 1987 「矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—原道矢原町～田沢付近縦幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—」徳高町教育委員会
- 徳高町教育委員会 2001a 「徳高町一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 徳高沢水系による開発、原古墳一担い手有成基盤整備事業徳高西部地区に伴う発掘調査報告書—」徳高町教育委員会

- 穂高町教育委員会 2001b 「穂高町他谷道跡—県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書—」 穂高町教育委員会
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 「穂高町誌」第2巻（歴史編上・民俗編） 穂高町誌刊行会
- 松多信尚・池田安隆・東郷正美・今泉俊文・澤洋 1999 「1：25,000 都市圏活断層図「松本」」 国土地理院
- 松本市教育委員会 1990 「松本市 大塚古墳 南方古墳 南方道跡—緊急発掘調査報告書—」 松本市文化財調査報告書No.74 松本市教育委員会
- 三郷村教育委員会 1988 「黒沢川右岸道跡」三郷村の埋蔵文化財第1集 三郷村教育委員会
- 三郷村教育委員会 1999 「三郷村埋蔵文化財（資料集）」三郷村の埋蔵文化財第4集 三郷村教育委員会
- 南安曇郡編 1923 「南安曇郡誌」 南安曇郡教育会
- 南安曇郡誌改訂編纂会編 1968 「南安曇郡誌」第2巻上 南安曇郡誌改訂編纂会
- 和田和哉 1999 「松本平北部における弥生中期後半から後期の土器について」『99シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨』長野県考古学会弥生部会 pp.40-46

調査報告書抄録

ふりがな	はたかじんじゃけいだいせいせき1							
書名	穂高神社境内遺跡1							
副書名	新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	土原和章、松田洋輔、横山幸子、株式会社バレオ・ラボ、山下泰永							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL 0263-71-2000							
発行年月日	西暦2018年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
穂高神社 境内遺跡 (第1次)	長野県安曇野市 穂高6658番 外	20220	2-36	36° 20' 17"	137° 53' 12"	20151008 ～ 20151130	636㎡	公共施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
穂高神社 境内遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴建物跡7 掘立柱建物跡3 ピット	弥生土器、土師器、須恵器、 灰釉陶器、金属製品		地表下2.2mで古墳時代後期から平安時代の集落跡を確認した。		
要約	穂高神社境内遺跡は、鳥川扇状地に所在する。過去に扁平片刃石斧及び赤彩を施された土師器が採集されていたが、今日まで発掘調査等はなく、遺跡内容は不明確なままであった。今般、安曇野市の新穂高支所建設事業に先立ち試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財が良好に残存していることを確認したため第1次発掘調査を実施した。発掘調査では、地表下2.2mで古墳時代後期から平安時代までの竪穴建物跡7棟を確認し、当該期の集落がこの場所に存在したことを明らかにした。今回の調査区付近では、遺構深度が深いことが判明したため、周辺に埋蔵文化財が良好に残存している可能性が高く、今後の土木工事等に留意する必要がある。							

安曇野市の埋蔵文化財第14集

穂高神社境内遺跡1

新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書

発行 平成30年(2018)3月30日
安曇野市教育委員会
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地
電話 0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会
印刷 藤原印刷株式会社